



宮崎市文化財調査報告書第101集

しも づる い せき
下 鶴 遺 跡

宅地分譲に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

下

鶴

遺

跡

一〇一四



2014

宮崎市教育委員会

宮崎市文化財調査報告書第101集 下鶴遺跡 正誤表



宮崎市文化財調査報告書第101集

下 鶴 遺 跡

宅地分譲に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

宮 崎 市 教 育 委 員 会



遺跡遠景（大淀川河口を望む。手前は八重川）



SES近景（中世）

卷頭カラー



序 文

本書は宅地分譲に伴い平成24年度に実施された、下鶴遺跡の発掘調査報告書です。

下鶴遺跡が所在する赤江地区は大淀川河口に程近く、宮崎平野の中でも肥沃な土地が広がる地域です。そのため中世期には莊園として利用され、また現在も豊かな水田が広がる地域となっています。

今回の発掘調査では中世の建物や溝の跡が確認され、今から700年ほど前の生活の一端を知る貴重な成果が得られました。これまで発掘調査が少なかった赤江地区の歴史をひもとくうえで、重要な発見となったことは言うまでもありません。

本書の成果が広く市民のみなさまに活用され、地域を愛する心を育む一助となれば幸いです。

平成26年 3月

宮崎市教育委員会

教育長 二 見 俊 一





例　　言

1. 本書は、平成24年度に実施した宅地分譲に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 現地における発掘調査、室内整理作業は以下の期間実施した。
発掘調査：平成24年10月1日～平成24年12月12日
整理作業：平成25年2月4日～平成25年3月19日、平成25年5月27日～平成25年8月2日
3. 調査組織
調査主体 宮崎市教育委員会 文化財課
(平成24年度)
調査総括 課長 田村 泰彦
課長補佐 山田 典嗣
監修理叢文化財係長 島田 正浩
調整事務 主査 鳥枝 誠
調査担当 主査 金丸 武司
技師 河野 裕次
嘱託員 川野 誠也
整理担当 嘴託員 船石 凉代
4. 現地における測量はトータルステーションを用いて行ない、個別の遺構実測は遺構サイズにより1/10又は1/20で作成した。また、個別遺構の写真撮影については6×7判モノクロ・リバーサルフィルム、35mmモノクロ・リバーサルフィルムを併用した。
5. 本書に掲載した遺構図の作図及びトレースは河野と川野が行なった。
6. 本書に掲載した遺物の実測及びトレースは、河野と沼口の監修の下で整理作業員が行なった。なお、金属製品の実測及びトレースは河野と日高優子（宮崎市教育委員会文化財課）が行なった。
7. 現地における空中写真撮影は（有）スカイサーベイ九州に、出土鉄製品の保存処理は㈱葵文化に業務委託した。出土青銅製品の保存処理については日高優子の協力を得た。
8. 本書における土色の表記は『新版 標準土色帳』に依拠した。
9. 本書に掲載した遺構全体図のうち、白抜き部分は搅乱を、網掛け部分は未掘を示す。また個別遺構図の白抜き部分は、切り合い関係のある別遺構を示す。
10. 本書で使用する遺構略号は以下の通りである。
SB…掘立柱建物、SC…土坑、SD…土坑墓、SE…溝状遺構、P…柱穴
また、調査時の遺構番号と本書掲載の番号は一部変更している。
11. 本書で示す方位は全て真北を示す。
12. 発掘調査により出土した遺物、及び調査における図面、写真、記録等は宮崎市教育委員会で保管している。
13. 本書の編集は河野が行なった。



本文目次

第Ⅰ章	遺跡の位置と環境	1
第1節	地理的環境	1
第2節	歴史的環境	1
第3節	周辺遺跡	1
第Ⅱ章 調査に至る経緯と調査の経過		
第1節	調査に至る経緯	3
第2節	調査の経過	3
第Ⅲ章 調査の成果		
第1節	調査成果の概要	3
第2節	基本層序	5
第3節	南区の調査成果	5
第4節	北1区・北2区の調査成果	11
第Ⅳ章 総 括		30

挿図目次

第1図	周辺遺跡	2
第2図	調査区全体図	4
第3図	南区遺構配置図	5
第4図	北1区遺構配置図	6
第5図	北2区遺構配置図①	7
第6図	北2区遺構配置図②	8
第7図	南区SE1・SE2	8
第8図	南区SB1・SB2・SB3	9
第9図	南区SB2・SB3出土遺物	9
第10図	南区SD1	10
第11図	南区SD1出土遺物	10
第12図	南区SE3出土遺物	10
第13図	南区のその他出土遺物	10
第14図	北2区SD2・SD3・SD4・SD5・SD6・P290	12
第15図	北2区SD3・SD4・SD6・P290出土遺物	13
第16図	北1区SE4・SE5・SE6	15
第17図	北2区SE5・SE6	16
第18図	北2区SE5・SE6・SE10土層	17
第19図	北2区SE10・SE13～SE18	18



第20図	北1区・北2区SE出土遺物①	20
第21図	北1区・北2区SE出土遺物②	21
第22図	北1区・北2区SE出土遺物③	22
第23図	北1区SB4・SB5・SB6・SB7	23
第24図	北1区SB4・SB5・SB6出土遺物	23
第25図	北2区SB8・SB9・SB10・SB11	24
第26図	北2区SC1・SC2	26
第27図	北2区SC1・SC2出土遺物	26
第28図	北2区SC3・SC4・SC5	27
第29図	北2区SC6・SC7・SC8	28
第30図	北2区SC出土遺物①	30
第31図	北2区SC出土遺物②	31
第32図	北2区SC出土遺物③	32
第33図	北2区SD7	33
第34図	北2区SD7出土遺物	33
第35図	北1区SE8・SE9・北2区SE11・SE12土層	34
第36図	北1区SE9・北2区SE11出土遺物	34
第37図	北1区・北2区その他出土遺物	35

表 目 次

第1表	遺物観察表①	37
第2表	遺物観察表②	38
第3表	遺物観察表③	39
第4表	金属製品観察表	39

図 版 目 次

写真図版1	南区調査写真	40
写真図版2	北1区・北2区調査写真	41
写真図版3	北1区・北2区調査写真	42
写真図版4	北1区・北2区調査写真	43
写真図版5	北1区・北2区調査写真	44
写真図版6	南区・北2区遺物写真	45
写真図版7	北1区・北2区遺物写真	46
写真図版8	北1区・北2区遺物写真	47
写真図版9	北1区・北2区遺物写真	48



第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

下鶴遺跡が所在する宮崎市大字田吉は、宮崎平野の中心部を流れる大淀川の河口部に近く、一帯には大淀川によってもたらされた広大な沖積層が広がる。遺跡は大淀川の支流である八重川と、八重川の支流である山内川に挟まれた標高約5mの微高地土に位置する。現在、遺跡よりも一段低い周辺の土地には水田が広がり、遺跡が立地する微高地部分は畑地や宅地として利用されている。近隣住民の話によると、遺跡西側の宅地や学校敷地部分は造成で盛土されており、元々は現在の水田面積の標高であったという。また、現在宅地となっている遺跡北側の一帯低い部分は、元々は八重川の旧川道であったという。これらのことから本遺跡は、水田耕作が可能な低地に接し、大淀川への河川交通路となる八重川の沿岸という、集落を営むには最適な場所に立地するといえる。

第2節 歴史的環境

田吉を含む大淀川右岸下流域は、宮崎平野部でも最も肥沃な地域であり、中世期には国富莊として史料に記載がみられる。国富莊成立の経緯については明らかではないが、日向国の在庁官人である日下部氏が関係すると考えられている。建久8年（1197）の『日向国図田帳写』には、鳥羽天皇の皇女八条院の御領として国富莊の記載がみられ、その国富莊の一部として「吉田」30町と記載があるが、これは「田吉」の誤写と考えられている。

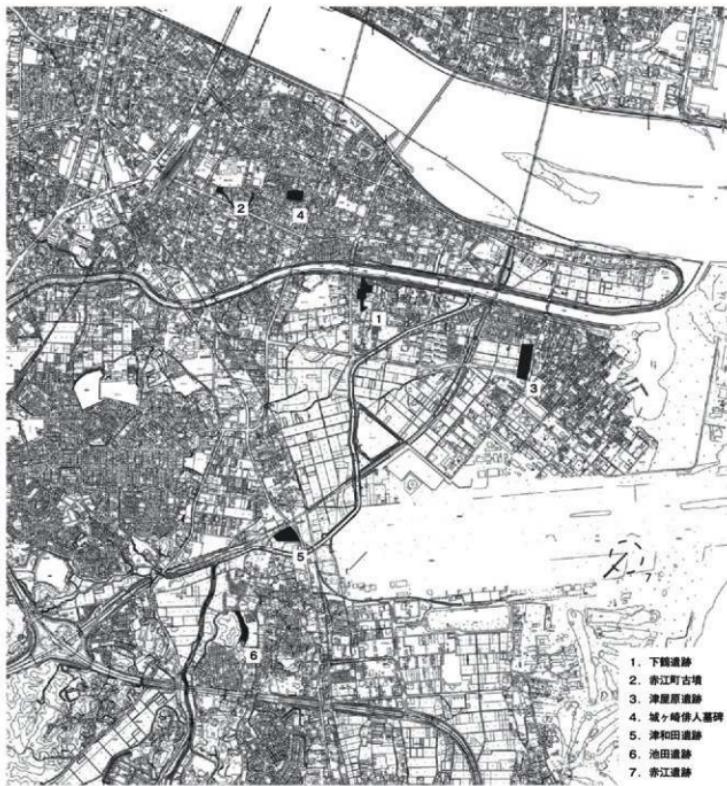
八条院の死後は皇室の御領となるが、元弘3年（1333）には後醍醐天皇により足利尊氏に与えられる。そして暦応2年（1339）後醍醐天皇の崩御に伴い尊氏は、その冥福を祈るために山城國に暦応寺（後の天龍寺）を建設するが、国富莊はその際の造営料として暦応寺に寄進される。こうした経緯もあってか、国富莊の一部であった本郷北方村高畑に尊氏を祀った墓があったことが『日向地誌』に記載されており、国富莊と尊氏との密接な関係を物語っている。

永和年間（1375-79）頃の地頭は伊東祐重であり、以後は伊東氏が地頭職を務めている。その伊東氏が島津氏との戦いに敗れ農後に落ち延びた後、一時は島津氏の領地となるが、豊臣秀吉の九州侵攻により島津氏が敗れると、初代武田藩主の伊東祐兵に与えられる。その後この一帯は、幕末まで武田藩領として発展していくこととなる。

第3節 周辺遺跡

下鶴遺跡の周辺には、県指定史跡である赤江町古墳をはじめ、津屋原遺跡、津和田遺跡、池田遺跡、赤江遺跡等が所在する。本発掘調査が実施された遺跡がなく、詳細が不明な遺跡がほんんどあるが、以下、採集遺物等で様相が判明している遺跡について記す。

赤江遺跡は、赤江飛行場（現宮崎空港）建設の際に多数の弥生土器が出土したことによって確認された遺跡である。採集された土器は概ね弥生時代後期から終末期に比定されるものが中心で、その他石斧や円石、甕等も採集されている。本市教育委員会による確認調査では遺構は確認されておらず、遺跡の性格は不明瞭だが、周辺の津屋原、松崎、立和地区にも弥生時代遺跡の分



第1図 周辺遺跡 ($S=1/25,000$)

布が確認されていることから、周辺の砂丘上に当時の生活域が広がっていたものと推測される。

県指定史跡である赤江町古墳は、指定当時2基が存在していたが、現在では円墳1基が確認できるのみである。近世期に盗掘を受けており、墳丘には石室に使用されていたと考えられる石材が散乱している。



第Ⅱ章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

平成24年6月19日、宅地分譲に伴い事業者から宮崎市大字田吉字下鶴1264番1他における埋蔵文化財所在の有無について照会がなされた。当該地は微高地上にあり、周辺に土器片等が散布している状況から埋蔵文化財の存在が予想されたため、平成24年7月17日から7月27日にかけて試掘調査を実施した。その結果、事業予定地内で中世を中心とする遺物、遺構が確認されたことから、本市教育委員会文化財課と事業者の間において埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ね、事業による掘削の影響を免れない1,736mについて、本発掘調査を実施するに至った。

第2節 調査の経過

現地における発掘調査は平成24年10月1日から開始した。事業予定地は道路により南北に分断され、また北側調査区も2箇所に分かれているため、それぞれを北1区、北2区、南区とし、まず南区から調査に着手した。調査はまず重機により表土を除去し、遺構検出面となる黄褐色粘土層、黄褐色砂層を露出させ、その後人力による遺構検出を行なった。遺構の掘削はトータルステーションによる測量、手測りによる実測、写真撮影と併行して行ない、10月22日に南区の調査を終了した。

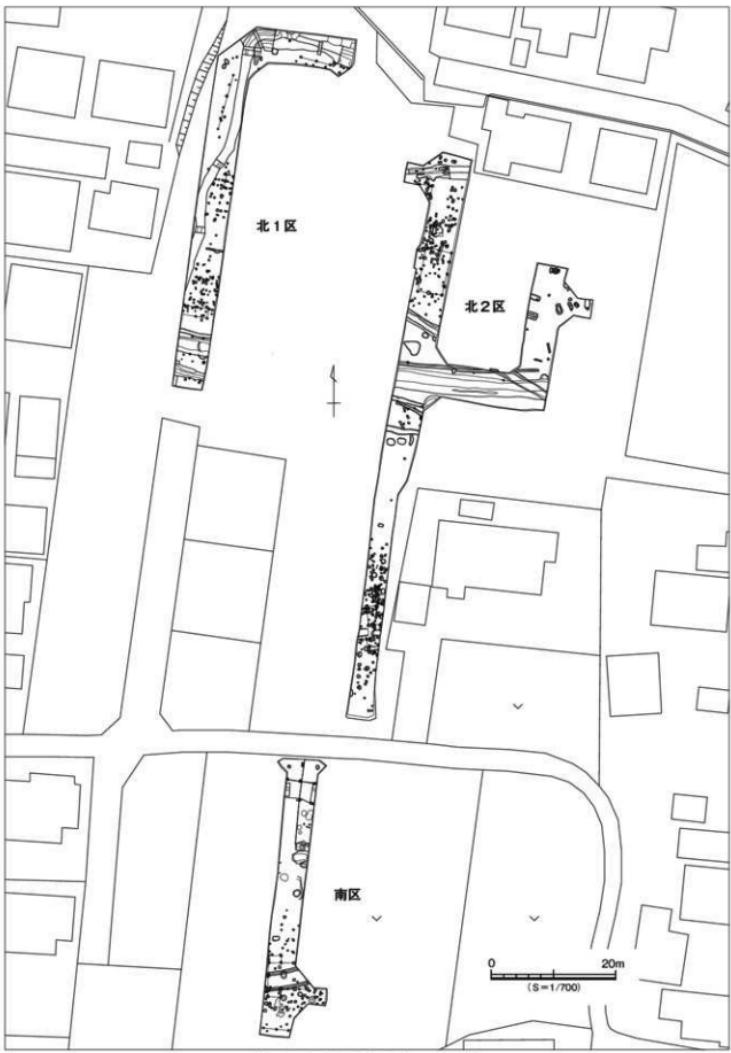
10月15日より、南区の調査と併行して北1区、北2区の表土剥ぎを行ない、その後南区と同様の工程で調査を行なった。なお、調査期間の都合からSE5掘削の一部は重機を用いて行なった。空中写真撮影は12月1日に行ない、12月12日に北1区、北2区の調査を終了し、12月13日にリース機材の撤去を行い、現地での発掘調査を終了した。発掘調査の延べ日数は52日間である。また、地元住民を対象とした遺跡現地説明会を12月2日に行ない、雨の中ではあったが12名の方々に来跡頂いた。

室内整理作業は宮崎市きよたけ埋蔵文化財センターで実施し、遺物洗浄、注記、接合を平成25年2月4日から3月22日まで行ない、実測、トレースは平成25年5月27日から8月2日まで行なった。

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査成果の概要

弥生時代から近世にかけての遺構、遺物が多数検出された。検出された遺構は、ビット591基、掘立柱建物11軒、土坑37基、溝状遺構18条、土坑墓7基である。多数のビットがみられるものの掘立柱建物として認定出来たのは11軒にとどまった。これは調査区の幅が狭いことが影響したものと考えられる。遺物は土師器皿、壺を中心として、白磁碗、皿、青磁碗、壺といった貿易陶磁器、瓦器、東播系須恵器、染付磁器、鉄製品、銅錢等が出土している。また、鍛冶炉の



第2図 調査区全体図 (S = 1/700)



壁材や輪の羽口、鉄滓といった鉄生産に関する遺物もみられる。

第2節 基本層序

下鶴遺跡の基本層序は以下の通りである。まず、調査区全体において、地表下約0.2m～0.5mの厚さで暗褐色の耕作土が堆積している。調査区の大部分ではこの表土下に地山層である黄褐色粘土層が堆積しているが、北1区、北2区の北側では粘土層が堆積せずに黄褐色砂質土層堆積し、地山層となっている。遺構検出面はこれら黄褐色粘土層、黄褐色砂質土層である。なお、北2区の南端部は大きく削平を受けており、地表下約1.5mの厚さで耕作土、客土が堆積し、その下にSE5の床面となっている鉄分を多く含む白色シルト質層が堆積している。また、部分的にではあるが表土下に黒褐色土層の堆積も認められる。遺構埋土はこの黒褐色土に類似する層が大半を占める。

第3節 南区の調査成果

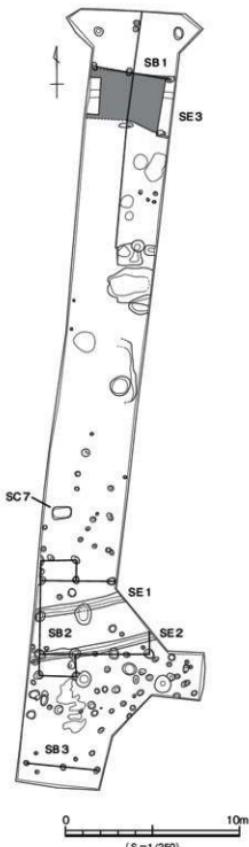
中世

溝状遺構

SE1・SE2 南区の中央南寄りの部分で検出された。SE1は幅0.59m、深さ0.40m、SE2は幅0.53m、深さ0.47mで、逆台形の断面形を呈するほぼ同規模の溝であり、約2mの間隔をおいて東西方向に並走している。溝の位置関係から、溝に挟まれた間の部分に道路状遺構の存在も想定されたが、硬化面や道路構築に関する痕跡は認められなかった。遺物の出土がなかったため詳しい時期は不明だが、SB2に切られていることから中世以前の遺構と考えられる。

掘立柱建物

SB1 南区北端で検出された。SE3に切られている。N-80°Wの方向でほぼ直線状に並ぶ3基の柱穴により構成されるが、本来は掘立柱建物の一部であり、調査区外に広がると考えられる。柱間は2m～2.4mである。柱穴はいずれも最大径0.46m前後、深さ0.15m前後であり、柱痕は検出されなかった。



第3図 南区遺構配図 (S=1/250)



第4図 北1区遺構配置図 ($S=1/250$)

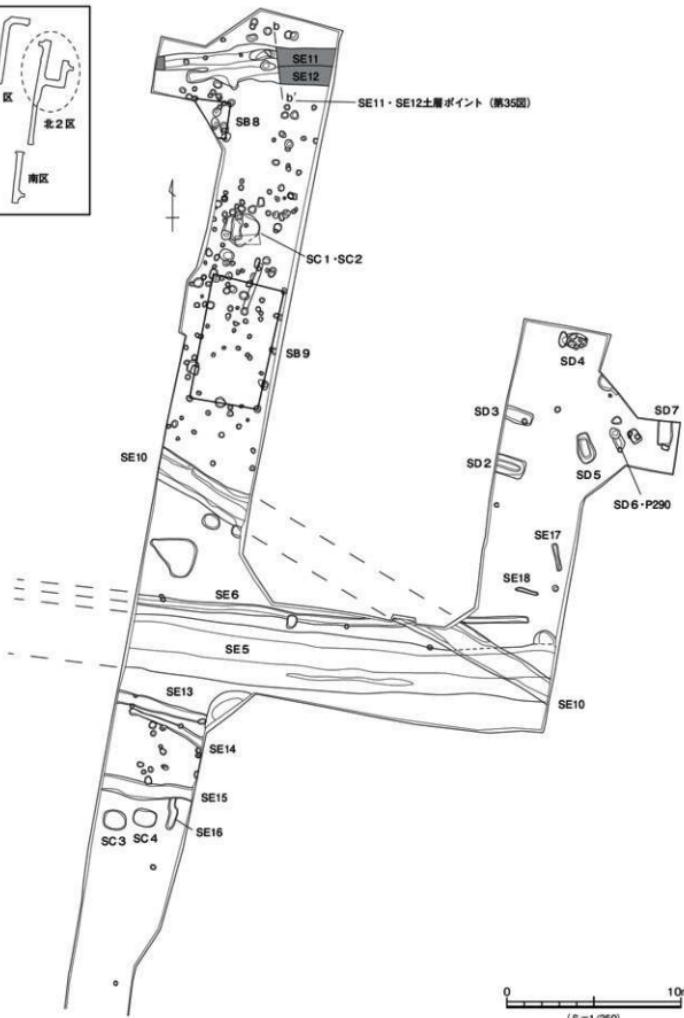
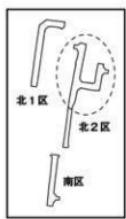
SB2 南区の中央南寄りの部分で検出された、3間×2間の掘立柱建物である。建物の一部は調査区外に広がっている。北面と南面に主柱穴に並列する柱穴がみられ、調査区外西側にも同様の柱穴列が存在するとすれば、いわゆる外周柱穴列となる可能性がある。桁行6.3m、梁行4.3mを測り、桁行はN-89°-Eではば東西方向を取る。柱穴の深さは0.5m~0.7mと南区で検出された他の柱穴よりも比較的深いが、柱痕は検出されなかった。SE2・SE3を切っているため、これらよりも新しい遺構である。

SB3 南区南端で検出された。N-85°-Wの方向でほぼ直線状に並ぶ3基の柱穴によって構成されるが、本来は掘立柱建物の一部であり、調査区外に広がると考えられる。柱間は2m~2.2mである。柱穴は最大径0.3m~0.4m、深さ0.46m~0.32mで、柱痕は検出されなかった。

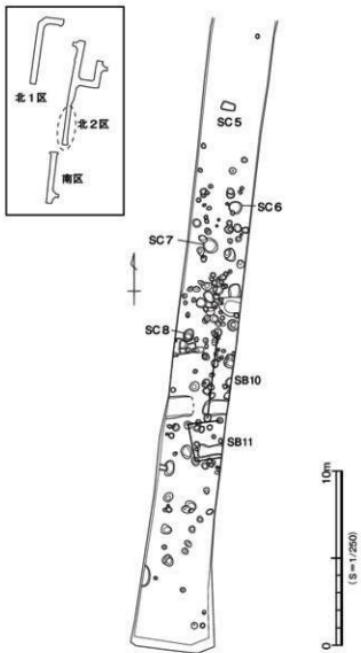
南区SB出土遺物 1~2はSB2出土の土師器皿である。いずれも系切底で、底部から湾曲しながら胴部が立ち上がり、口縁部に至る。3~4はSB3の出土遺物である。3は土師器の皿で、系切底の底部から直線的に胴部が立ち上がり、口縁部に至る。4は土師器の壺である。ヘラ切底の底部から胴部が外傾しながら立ち上がる形態を呈する。

土坑墓

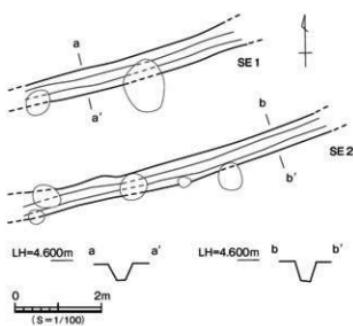
SD1 南区中央やや南西寄りで検出された。長軸1.1m、短軸0.65mの隅丸長方形プランを呈し、深さ0.63mを測る。長軸はN-86°-Eの方向を取る。床面に浅いピット状の掘り込みが認められ、これは



第5図 北2区遺構配置図 (S = 1/250)



第6図 北2区造構配置図② (S=1/250)



第7図 南区SE1・SE2 (S=1/100)

造構の切り合いの可能性もあるが、埋土からは判別できなかった。遺物は床面直上で土師器坏、青磁碗、轻石、礫が出土している。土坑内に棺の痕跡は認められなかったが、土師器坏や青磁碗が出土していることから、土坑墓の可能性が考えられる。

SD 1 出土遺物 5と6は土師器の坏である。5は底部から丸みを帯びながら胴部に立ち上がり、そのまま直線的に口縁部に至る。6は胴部下半が欠損しているが、やや外反する口縁部を呈する。7は青磁碗である。外面に鎬蓮弁文が施されており、弁の中心に稜線が認められる。龍泉窯碗II類と考えられる。

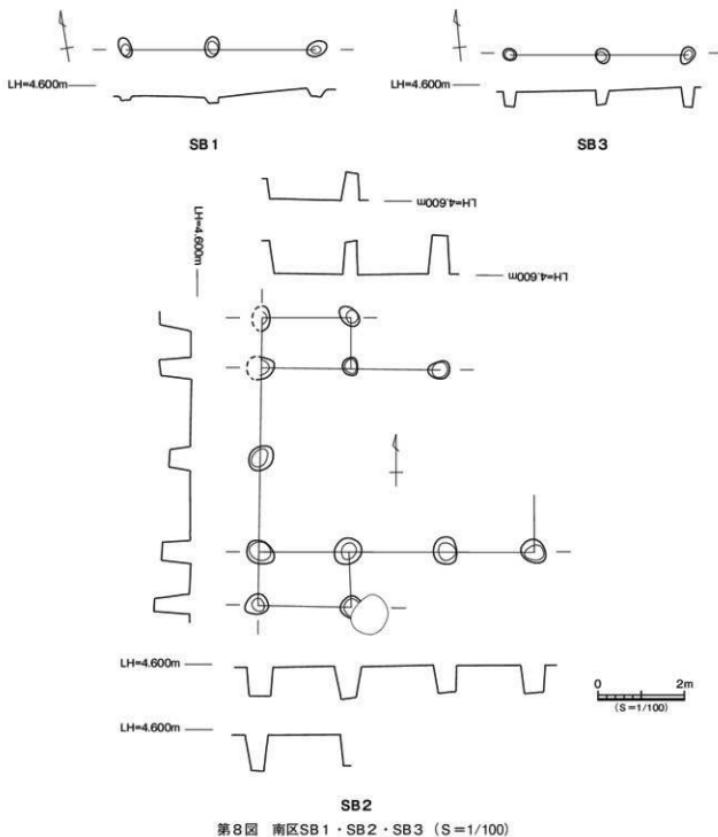
近世以降

溝状造構

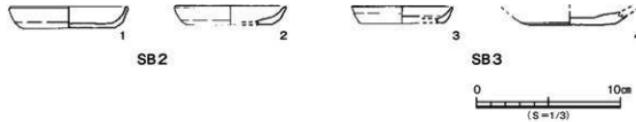
SE 3 南区北端で検出された。調査区壁際のトレンチしか掘り下げを行っていないが、幅3.4m、深さ0.8mと大型で、断面は逆台形状を呈する。東西方向に走っており、調査区外にも広がっている。造構内からは近世～近代の陶磁器が出土している。

SE 3 出土遺物 8は土師器の熔块である。口縁部下位に孔が穿たれており、外面には煤が付着する。9と10は陶器の擂鉢である。口縁部が断面三角形状に肥厚し、内面にはカキメが密に施される。

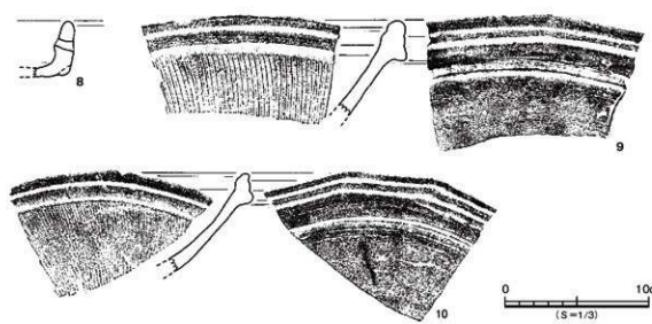
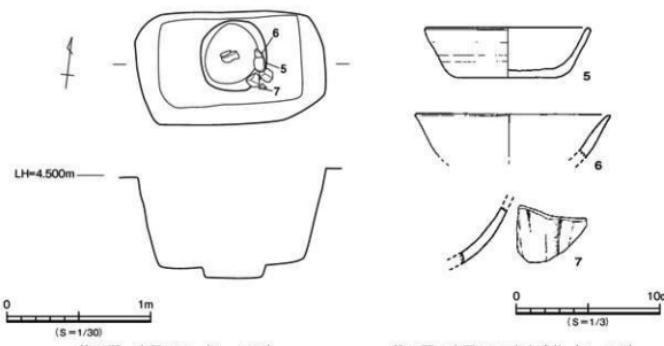
南区その他出土遺物 11は東播系須恵器の鉢である。口唇部平坦面が外側に傾斜し、口縁部がやや肥厚する形態を呈する。12は土製の羽口である。強く被熱しており、変色している。13は土製の錘である。長方形の体部に4つの孔を穿つ四目土錘である。中央に縄目の痕跡が認められる。



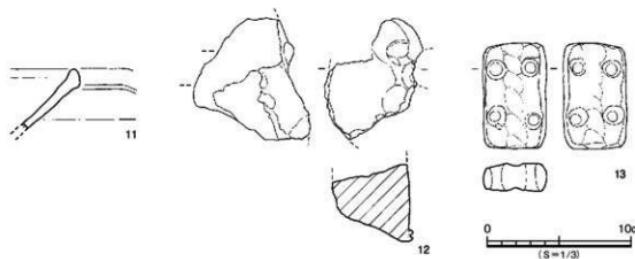
第8図 南区SB1・SB2・SB3 (S=1/100)



第9図 南区SB2・SB3出土遺物 (S=1/3)



第12図 南区SE 3出土遺物 (S=1/3)



第13図 南区その他出土遺物 (S=1/3)



第4節 北1区・北2区の調査成果

弥生～古墳時代

土坑墓

SD2 北2区の北東端部分で検出された。一部が調査区外に伸びているが、長軸1.7m以上、短軸1.1m、深さ0.28mの隅丸長方形プランを呈し、二段掘りの構造である。長軸はN-18°-Wの方向を取る。遺物は出土していないが、近接して分布する弥生～古墳時代の土坑墓と埋土が類似すること、及び主軸方向が類似することから同時期の土坑墓と考えられる。

SD3 北2区の北東端部分で検出された。ピットに切られている他、一部が調査区外に伸びているが、長軸1.6m以上、短軸0.83m、深さ0.44mの隅丸長方形プランを呈すると考えられる。長軸はN-30°-Wの方向を取る。南東角の床面からやや浮いた状態で鉄鎌が1点出土している。

SD4 北2区の北東端部分で検出された。多数のピットで切られ残存状況が悪いが、長軸1.4m以上、短軸0.65m以上、深さ0.3mの隅丸長方形プランを呈すると考えられる。長軸はN-20°-Wの方向を取る。南側長軸寄り部分の床面からやや浮いた状態で刀子片が1点出土している。

SD5 北2区北東端部分で検出された。長軸1.7m、短軸1m、深さ0.7mの楕円形プランを呈し、二段掘りの構造である。長軸はN-75°-Wの方向を取る。遺物は出土していない。

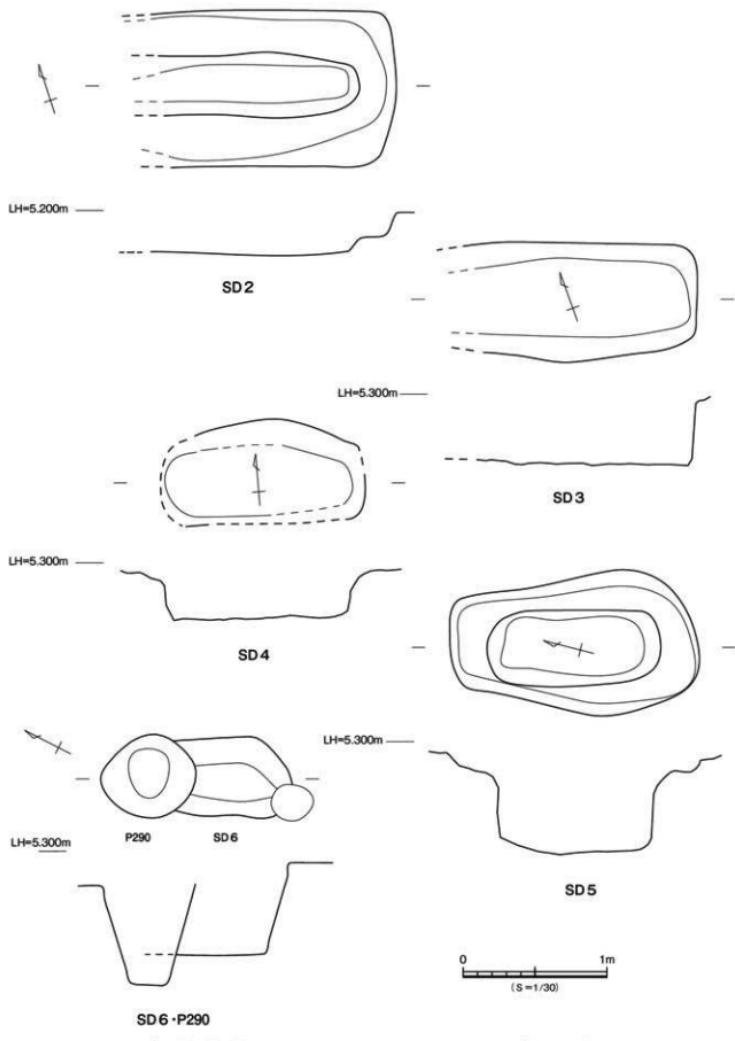
SD6 北2区北東端部分で検出された。現代の擾乱とP290に切られており残存状況が良くないが、長軸0.66m以上、短軸0.54m、深さ0.62mの楕円形もしくは隅丸方形プランを呈すると考えられる。長軸はN-25°-Wの方向を取る。検出面付近で高坏の脚台片が出土している。また、SD6を切るP290からはSD6の高坏と同時期の壺が出土している。

SD3・SD4・SD6・P290出土遺物 14はSD3出土の柳葉鎌である。現存長8.0cm、刃部幅3.2cm、刃部厚0.35cm、重量17.3gを測る。茎部が残存していないが、木製柄の樹皮部分のみが残存している。また、外面に木質が付着しているが、鉄鎌そのものに伴うものではないと考えられる。15はSD4出土の刀子である。両端が欠損しているが、現存長6.3cm、刃部幅1.2cm、刃部厚0.3cm、重量8.3gを測る。茎部からほぼ直線的に刃部へ至る形態を呈すると考えられ、素環刀子の可能性も考えられる。木質が付着しているが、刀子そのものに伴うものではないと考えられる。16はSD6出土の高坏である。脚台部がスクート状に開き裾部で内側に湾曲するので、弥生時代終末期～古墳時代初頭に位置付けられる。17と18はP290出土の壺である。17は尖り気味の丸底で胴部中位に最大径をもつ形態を呈する。18は胴部上位に最大径をもち、肩が張る形態を呈する。外面には縦位のミガキ調整が認められる。いずれも弥生時代終末期～古墳時代初頭に位置付けられよう。

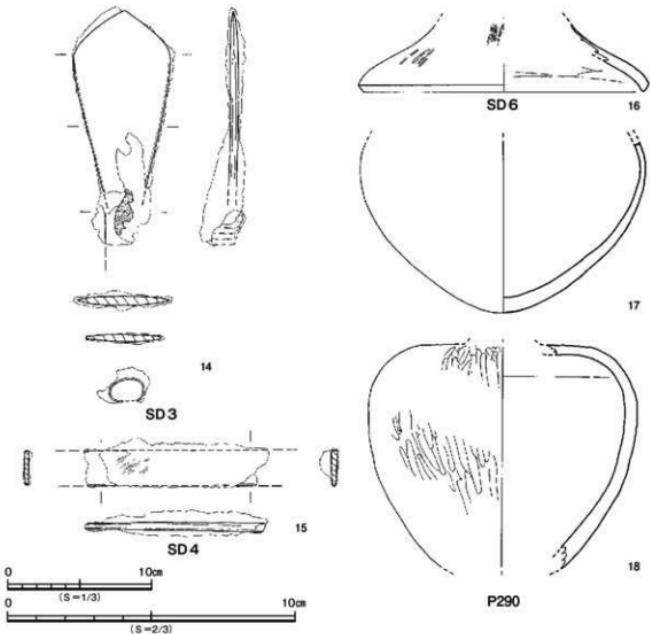
中世

溝状遺構

SE4 北1区南端で検出された。最大幅1.9m、深さ0.4mで断面逆台形状を呈する。部分的にテラス状の段を有する箇所がある。SE5、SE6とはほ並走する形で東西方向に走るが、北2区では検出されなかった。埋土は地山ブロックを含む層がレンズ状に堆積しており、自然埋



第14図 北2区SD2・SD3・SD4・SD5・SD6・P290 (S = 1/30)



第15図 北2区SD3・SD4・SD6・P290出土遺物 (S=1/3・鉄器 S=2/3)

没したと考えられる。

SE5 北1区南端と北2区中央部で検出された。最大幅3.4m、深さ1m~1.25mと大型で、断面は逆台形状を呈する。緩やかに弧を描きながら東西方向に走っており、調査区外にも広がっている。土層をみると、地山粘土ブロックが混じる暗褐色土がレンズ状に何層にも重なって堆積しており、掘削後は自然堆積の後埋没したと考えられる。また、溝中位に橙色粒子を含む砂混じりの層が堆積しており、洪水等に伴う堆積物の可能性もある。溝掘り方よりも約0.1m~0.2m高いレベルで鉄分が多く混じる層が堆積していることから、一定期間水が流れている時期があったことが確認出来る。北2区でSE10に切られている。

SE6 北1区南端と北2区中央部で検出された、SE5の北側を並走する小型の溝である。幅0.5m~0.65m、深さ0.25m~0.35mで、断面は逆台形状を呈する。土層をみると、地山粘土ブロックが混じる暗褐色土がレンズ状に堆積しており、SE5の堆積状況と類似する。北2区西壁上面層をみると、SE5とSE6の直上に共通して暗褐色土（第18図の④層）が堆積することから、両溝が埋没し溝としての機能を失った時に大きな差は無いと考えられる。北2区で

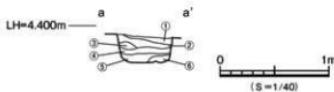
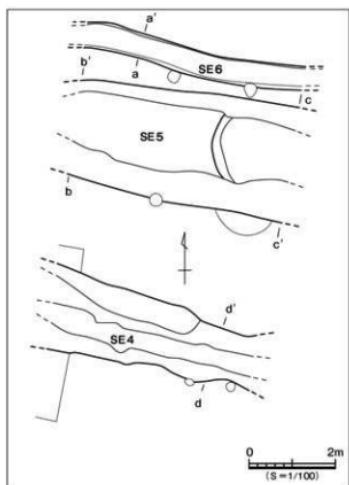


はSE5と同様にSE10に切られている。

SE7 北1区中央部で検出された。現況は大きく削平を受けていると考えられ、最大幅0.46m、深さ0.03mとかなり浅い。調査区外東側から走っており、調査区内で途切れている。溝の方向はほぼ東西方向を取る。

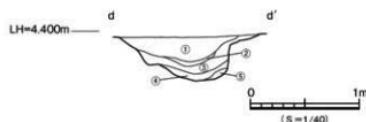
SE4～SE7出土遺物 19～20はSE4の出土遺物である。19は東播系須恵器の鉢である。口唇部が部に対して直交し、口縁部が肥厚する形態を呈する。20は素焼陶器の甕もしくは壺の胴部と考えられる。色調は暗赤灰色を呈し、備前焼と考えられる。

21～57はSE5の出土遺物である。21～24は土師器の皿である。いずれも器高が1.0cm～1.4cmと低く、胴部から内湾しながら口縁部に至る形態を呈する。底部は22と23は糸切底、24のみヘラ切底で、21は摩滅により不明瞭である。25～27は土師器の壺である。25は胴部からやや内湾しながら口縁部に至る形態を呈する。底部は25が糸切底で、26と27はヘラ切底である。28は土師器の甕である。全体的に摩滅が進んでいるが、内底面に煤の付着が確認できる。29～35は土師器の甕と考えられる。29～31はく字に屈曲する口縁部を呈し、口唇部を丸くおさめるものである。32は小破片であり全体的な形態が不明瞭であるが、外反口縁の可能性があり、一部が片口状に形成されている。33はく字に屈曲する口縁部である。内外面にハケメ調整が施され、口唇部に平坦面を有する。35は口縁部外面に鉗状の突帯を有する甕である。内面はハケメが施され比較的丁寧に調整されているが、全体的にはユビオサエ痕を多く残し重みが大きい。36は不明土製品である。ユビオサエで成形され部分的にヘラ状の工具痕を残す。37～43は瓦器である。37はやや浅めの器形に断面三角形状のいびつな高台が付く碗である。口縁部は丸みを帯び、わずかに外反する。外面は胴部下半にユビオサエ痕を顯著に残し、口縁部に強いヨコナデを施す。見込みは平行線状の暗文を施した後、圓線状に粗いミガキを施す。ミガキの単位は1mm～3mmと太めである。38は37よりも深めの器形に断面台形状のいびつな高台が付く碗である。口縁部は丸みを帯び、わずかに外反する。外面は胴部下半にユビオサエ痕を残し、口縁部に強いヨコナデを施す。内面は平行線状の暗文を施した後、圓線状の粗いミガキを施す。39は口縁部下位で胴が張る器形を呈する碗である。口縁部内面が凹線状に凹み、わずかに外面上方に突出する。外面に単位の細かいミガキを横位に施すが、ミガキの密度は粗である。内面は単位の細かいミガキを横位に施し、ミガキの密度は密である。40は碗である。器高は浅く、底部から緩やかに外傾しながら口縁部に至る形態を呈する。41は皿と考えられる破片である。外傾する口縁部をもち、胴部で屈曲し底部に至る形態と考えられる。42も皿と考えられる破片である。口縁部が小さく外反し、胴部で明瞭に屈曲し底部に至る形態と考えられる。43は皿である。わずかに丸みを帯びる平底で、緩やかに凸曲しながら胴部が立ち上がる形態を呈する。見込みには圓線状のミガキを施した後平行線状の暗文を施す。44～47は東播系須恵器の鉢である。44は胴部から直線的に開く口縁部で、口唇部平坦面が外側に傾斜する。45と46は接合しないものの同一個体と考えられる資料で、形態、色調、胎土共に極めて類似する。やや丸みを帯びる腰部から直線的に口縁部に至る形態で、口縁部が外側にやや肥厚する。口唇部平坦面は胴部に対して直交する。47は完形資料で、一部の破片はSE5床面に貼り付く形で出土した。わずかに丸みを帯びる腰部から直線的に口縁部に至る形態で、口縁部はわずかに肥厚する。50～52は白磁碗である。50は太宰府編年IV-1類に分類される。口縁部内面に釉垂れが認めら



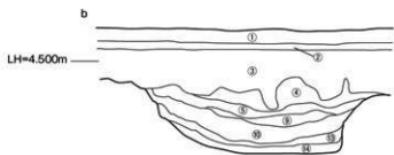
- ① : Hue10YR2/3 黒褐色 シルト質ローム
- ② : Hue10YR5/4 暗褐色 地山ブロックを含む
- ③ : Hue10YR3/3 暗褐色 ローム 地山ブロックを含む
- ④ : Hue10YR3/2 黒褐色 ローム
- ⑤ : Hue7.5YR3/1 黒褐色 ローム
- ⑥ : Hue7.5YR4/3 暗褐色 ローム 地山との漸移層

SE6 土層(北1区)



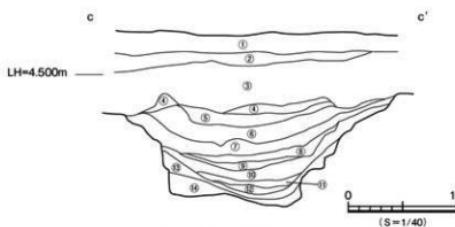
- ① : Hue2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 ローム
- ② : Hue2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 ローム 白色、褐色粒子、鉄分を含む
- ③ : Hue2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 ローム 白色、褐色粒子、鉄分を含む
- ④ : Hue2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 ローム 白色、褐色粒子、鉄分を含む
- ⑤ : Hue2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 ローム 地山ブロック、鉄分を含む

SE4 土層(北1区)



- ① : Hue10YR3/4 暗褐色 ローム 稲作土
- ② : Hue10YR4/4 暗褐色 ローム 稲作土
- ③ : Hue10YR4/4 暗褐色 ローム 稲作土
- ④ : Hue10YR3/3 暗褐色 ローム 清理土① 地山ブロックを含む
- ⑤ : Hue10YR5/3 黄褐色 ② 清理土 地山ブロックを含む
- ⑥ : Hue10YR5/4 黄褐色 ③ 清理土③ 地山ブロックを含む
- ⑦ : Hue7.5YR4/4 暗褐色 ④ 清理土④ ローム

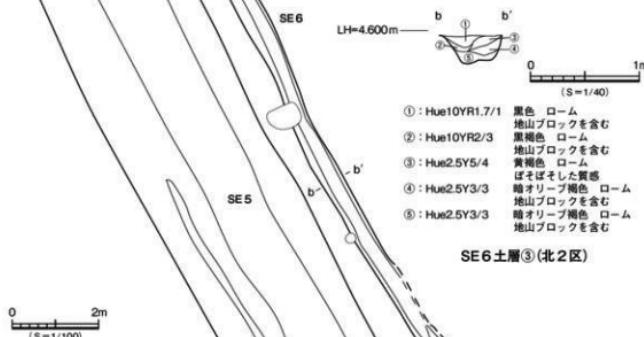
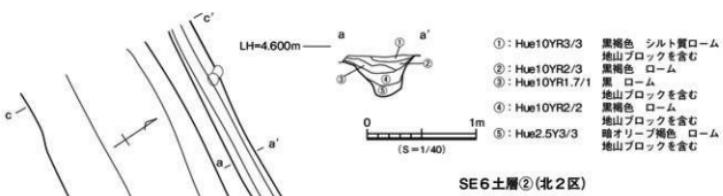
SE5 西壁土層(北1区)



- ⑧ : Hue10YR4/2 反黄褐色 砂 清理土⑤
- ⑨ : Hue10YR5/2 反黄褐色 砂 清理土⑥
- ⑩ : Hue10YR1/4 暗褐色 ⑦ 清理土⑦ ローム
- ⑪ : Hue10YR1/2 黑褐色 ⑧ 清理土⑧ ローム
- ⑫ : Hue10YR3/1 黑褐色 ⑨ 清理土⑨ 鉄分を多く含む
- ⑬ : Hue7.5YR3/3 暗褐色 ⑩ 清理土⑩ ローム
- ⑭ : Hue10YR3/3 黄褐色 ⑪ 清理土⑪ 地山ブロックを多く含む

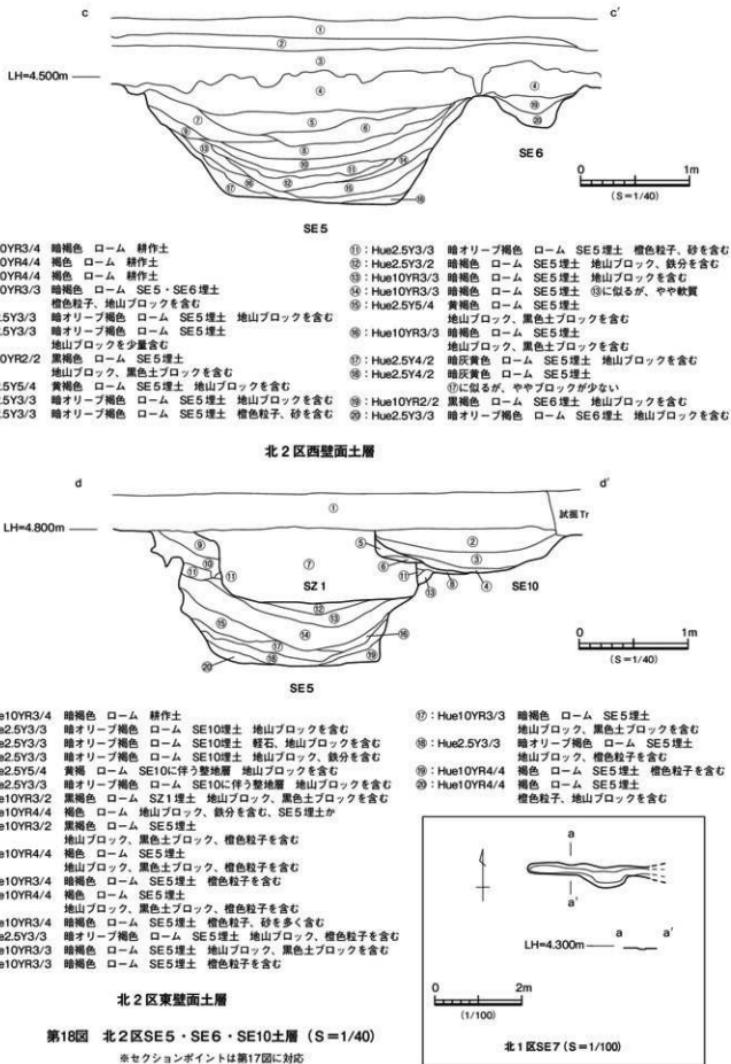
SE5 東壁土層(北1区)

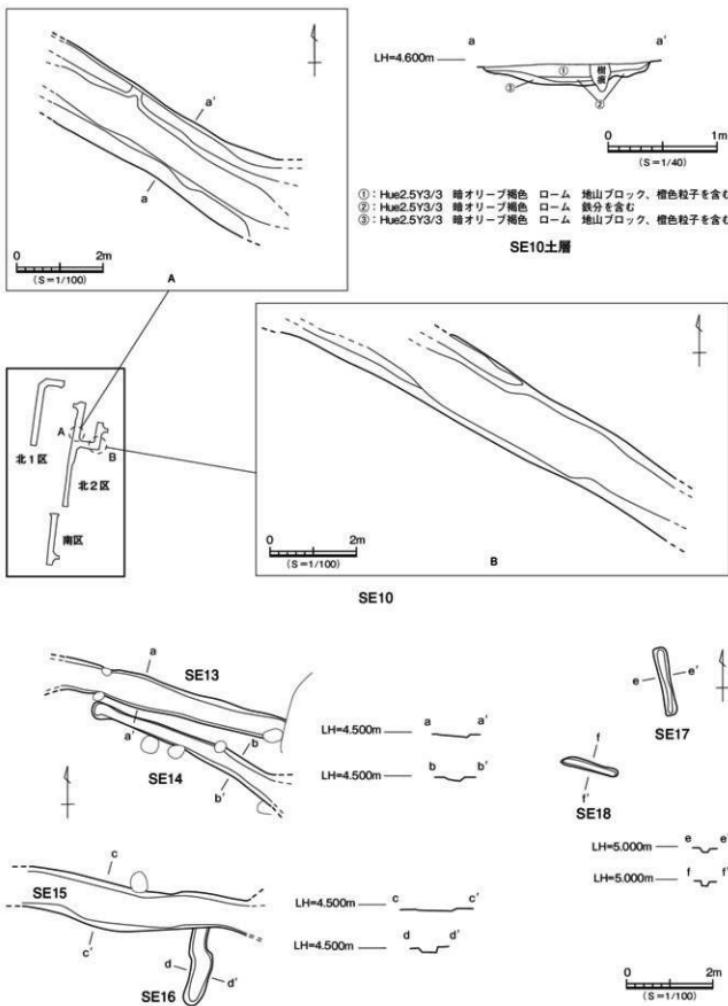
第16図 北1区SE4・SE5・SE6 (平面図 S=1/100・土層図 S=1/40)



*c-c', d-d'の土層図は第18図

第17図 北2区SE5・SE6 (平面図 S=1/100・土層図 S=1/40)





第19図 北2区SE10・SE13～SE18 (S=1/100・SE10土層図のみ S=1/40)

れる。51は高台天井部がやや深めにケズリ込まれた形態で、太宰府編年V類に相当すると考えられる。52は太宰府編年V-4類と考えられる胴部片である。53～54は青磁碗である。大宰府編年Vの龍泉窯I-2類に分類される。55は陶器の壺か壺と考えられる胴部片である。色調は褐灰色を呈し、外面に釉の付着が認められる。56は輸入陶器の壺と考えられる。外底面に回転ケズリによる凹みが認められる。57～58は石製品である。57は滑石製石鍋の転用品で、一部に煤の付着が認められる。58は台石と考えられる。片面には磨面が認められ、もう片面には鉄分の付着が認められることから、鉄生産に関連する遺物と考えられる。

59～62はSE6の出土遺物である。59～60は白磁碗である。59は大宰府編年III類に、60は大宰府編年IV-1類に分類される。61は白磁皿である。大宰府編年IX-1類に分類されるもので、口縁部内面が釉剥離されている。62は敲石である。両側面及び上端、下端部に敲打痕が認められる。

63～64はSE7の出土遺物である。63は東播系須恵器の鉢で、口唇部平坦面が胴部に直交し、口縁部が上方に拡張する。他の東播系須恵器鉢と比較するとやや薄手である。64は土錘である。

SE10 北2区中央部で検出された。幅1.6m、深さ0.19mで、断面は逆台形状を呈する。埋土は地山粘土ブロックが混じる暗オリーブ褐色土であり、SE5やSE6とはやや異なる。埋土はレンズ状に堆積しており、鉄分が多く含む層があることから一定期間水が流れていた時期があつたと考えられる。また、北2区東壁面土層にはSE10構築に伴う整地層と考えられる、地山ブロックを多く含む土層が認められる。SE5とSE6を切っており、これよりも新しい遺構である。

SE13 北2区中央部で検出された。現況は大きく削平を受けていると考えられ、幅0.7m、深さ0.06mしか残存していない。埋土は暗褐色土である。東側は搅乱に切られているが、東西方向に走り調査区外にも広がっている。

SE14 北2区中央部、SE13に近接して検出された。SE13と同様に現況は大きく削平を受けていると考えられ、幅0.46m、深さ0.09mしか残存していない。埋土は暗褐色土である。調査区東側から走っており、SE13と交わる直前で途切れている。

SE15 北2区中央部で検出された。SE13・SE14と同様に現況は大きく削平を受けていると考えられ、幅1m、深さ0.05mしか残存していない。埋土は暗褐色土である。東西方向に走り調査区外にも広がっている。SE16を切っているため、これよりも新しい遺構である。

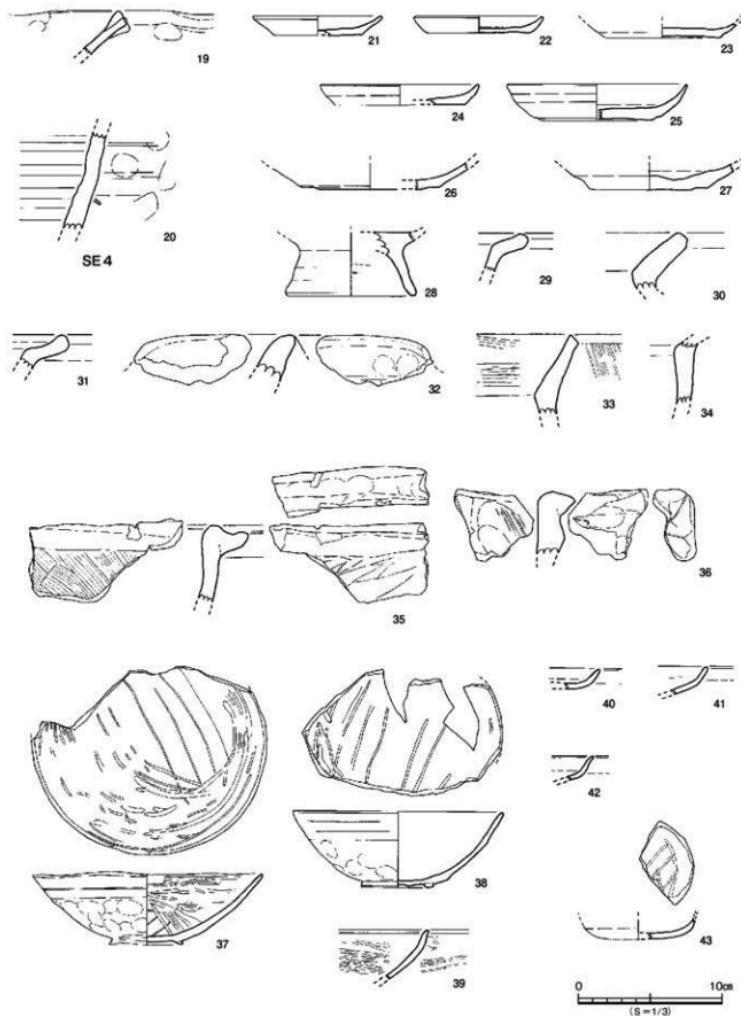
SE16 北2区中央部、SE15に切られる形で検出された。幅0.48m、深さ0.13mを測り、断面逆台形状を呈する。埋土は暗褐色土である。南北方向に走っており、北側はSE15に切られている他、南側は削平のためか1.8m程の長さで途切れている。

SE17 北2区東部で検出された、南北方向に走る溝である。現況は大きく削平を受けており、幅0.2m、深さ0.1m、長さ1.6mしか残存していない。埋土は暗褐色土である。

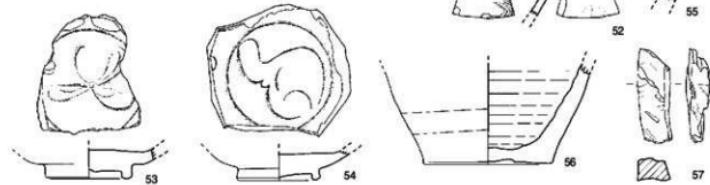
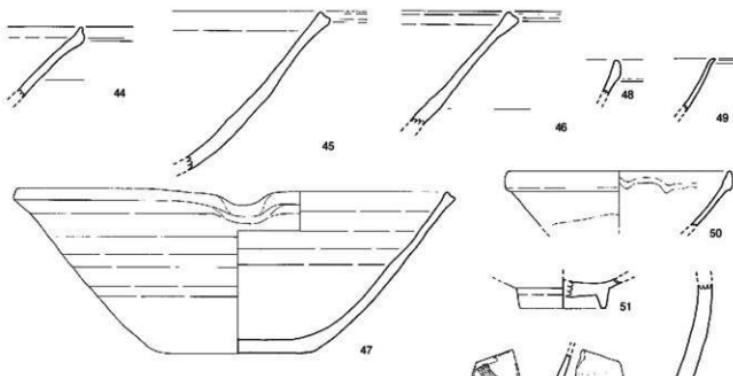
SE18 北2区東部で検出された、東西方向に走る溝である。SE17と同様に現況は大きく削平を受けしており、幅0.2m、深さ0.1m、長さ1.3mしか残存していない。埋土は暗褐色土である。

SE10・SE13～SE18出土遺物 65～66はSE10の出土遺物である。65は陶器の底部片で、鉢あるいは壺と考えられる。黄灰色を呈し、焼成は硬質である。66は土錘である。

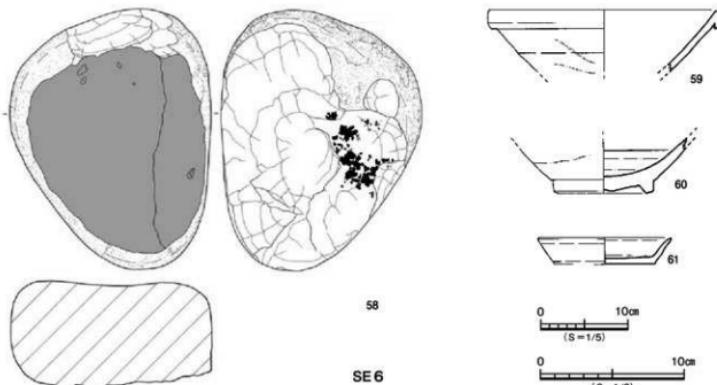
67はSE14出土の青磁碗である。外面に錫連蓮文が略化したような沈線状の文様がみられる



第20図 北1区・北2区SE出土遺物① (S=1/3)



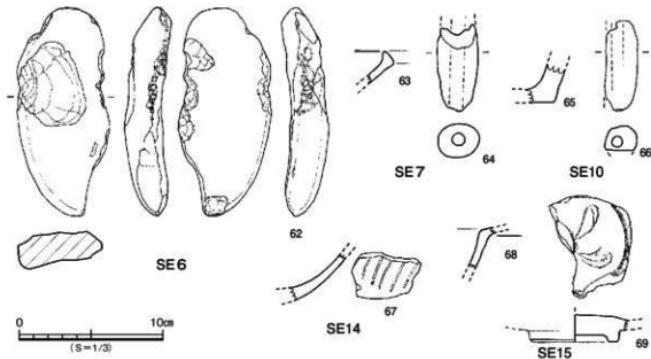
SE 5



0 10cm
(S = 1/3)

0 10cm
(S = 1/5)

第21図 北1区・北2区SE出土遺物② (S = 1/3・No58のみ S = 1/5)



第22図 北1区・北2区SE出土遺物③ (S=1/3)

ことから、大宰府編年の龍泉窯Ⅳ類の可能性が考えられる。

68～69はSE15の出土遺物である。68は青磁環の口縁部片で、大宰府編年の龍泉窯Ⅲ類に相当すると考えられる。69は青磁碗である。大宰府編年の龍泉窯I～II類に分類される。

掘立柱建物

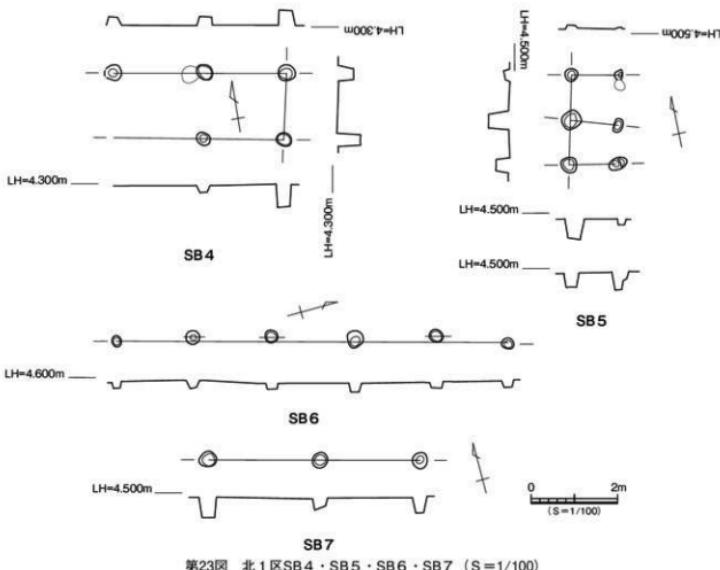
SB4 北1区南側で検出された。現況では南西隅の柱穴がみられないが、本来は2間以上×1間の掘立柱建物であり、調査区外に広がると考えられる。桁行4m以上、梁行1.5mを測り、桁行はN-81°-Wの方向を取る。柱間は桁行で1.8m～2.1m、梁行1.5mを測る。柱穴の最大径は0.34m、深さ0.19m～0.54mで、柱痕は検出されなかった。

SB5 北1区中央部で検出された。1間以上×2間の掘立柱建物であり、調査区外に広がると考えられる。桁行1.1m以上、梁行2mを測り、桁行はN-72°-Wの方向を取る。柱間は全て1.1m前後で揃っている。柱穴の径は0.18m～0.46m、深さも0.05m～0.46mと個々の柱穴で差が大きい。柱痕は検出されなかった。

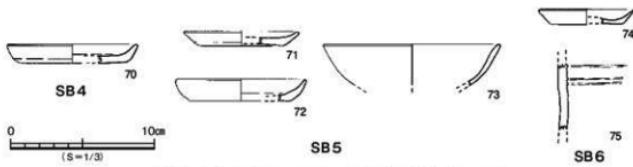
SB6 北1区北側で検出された。N-16°-Eの方向ではほぼ直線状に並ぶ6基の柱穴によって構成されるが、本来は柵列状の造構や掘立柱建物の一部であった可能性が考えられる。柱間は1.6m～1.9mを測る。柱穴の径は0.22m～0.39m、深さ0.13m～0.2mと浅く、いずれの柱穴からも柱痕は検出されなかった。

SB7 北1区北東部で検出された。N-75°-Wの方向ではほぼ直線状に並ぶ3基の柱穴により構成されるが、本来は掘立柱建物の一部であり、調査区外に広がると考えられる。柱間は2.3m～2.5mである。柱穴の径は0.34m～0.39mとほぼ同規模であるが、深さは0.24m～0.49mと差が大きい。柱痕は検出されなかった。

SB8 北2区北部で検出された。1間×1間以上の掘立柱建物で、建物の大半は調査区外に広がり、建物北東隅の一部を検出したものと考えられる。柱間は2.1m前後で揃っており、



第23図 北1区SB4・SB5・SB6・SB7 (S=1/100)

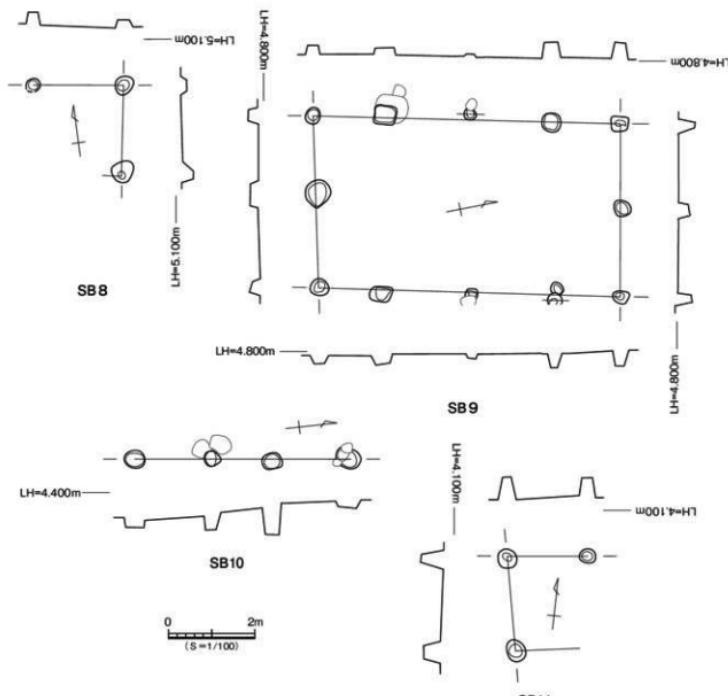


第24図 北1区SB4・SB5・SB6出土遺物 (S=1/3)

柱穴の径は0.3m～0.47m、深さは0.2m～0.27mを測る。柱痕は検出されなかった。

SB9 北2区北部で検出された、4間×2間の掘立柱建物である。桁行7.3m、梁行4.2mを測り、桁行はN-11°-Eの方向を取る。柱穴の径は0.33m～0.66m、深さも0.8m～0.34mと差が大きい。柱痕は検出されなかった。

SB10 北2区南部で検出された。N-7°-Eの方向ではほぼ直線状に並ぶ4基の柱穴によって構成されるが、本来は掘立柱建物の一部であった可能性が考えられる。柱間は1.4m～1.7mである。柱穴は径0.56m～0.4mではほぼ一定するが、深さは0.16m～0.7mと差が大きい。柱痕は検出されなかった。遺物は出土していないが、他の掘立柱建物と柱穴埋土が類似することから、中世～近世の遺構と推測される。



第25図 北2区SB8・SB9・SB10・SB11 (S=1/100)

SB11 北2区南部で検出された。1間×1間以上の掘立柱建物で、建物の大半は調査区外に広がり、建物西側の一部を検出したものと考えられる。柱間は2.2~1.8m、柱穴の径は0.5m~0.37m、深さは0.4m~0.53mを測る。柱痕は検出されなかった。遺物は出土していないが、柱穴の埋土から中世~近世の遺構と推測される。

北1区・北2区SB出土遺物 70はSB4出土の土師器皿である。外面の胴部下位に稜線を有するもので、底部は糸切りである。

71~73はSB5の出土遺物である。71と72は土師器の皿で、71は胴部がやや外反しながら立ち上がり器高が低い形態、72は胴部が丸みを帯びて立ち上がる形態を呈し、いずれも糸切底である。73は黒色土器B類の碗と考えられる。器形は胴部が丸みを帯びながら立ち上がり、口縁



部でわずかに外反する形態を呈する。摩滅により器面調整は不明である。

74と75はSB 6 の出土遺物である。74は土師器の皿で、胴部がやや外反しながら立ち上がる形態を呈する。底部は糸切底である。75は弥生土器の胴部片と考えられる。ヘラ状工具により横位の凹線が2条施文されている。

土坑

SC 1・SC 2 北 2 区北部で検出された。SC 2 がSC 1 に切られている。SC 1 は柱穴に切られているが、長軸1.35mの隅丸長方形プランを呈し、深さは0.19mを測る。埋土は白色の粘土を多く含む黒褐色土である。SC 2 は最大径2.08m、深さ0.19mの不整円形プランを呈する。黒褐色の埋土中に土師器の小破片を多く含む。出土遺物は小破片が多いが、およそ12世紀～13世紀に位置付けられる遺物が両土坑から出土している。

SC 1・SC 2 出土遺物 76～79はSC 1 の出土遺物である。76は土師器の壺で、底部が欠損しているが、丸みを帯びながら胴部が立ち上がり、口縁部は直線的に伸びる形態を呈する。77と78は瓦器の碗である。77は口縁部がやや外反するもので、摩滅により調整は不明瞭であるが、口縁部に横位の強いヨコナデが認められる。78は断面三角形の高台を有する底部片で、見込みに弧状の暗文が認められる。79は陶器の壺である。肩部から外反しながら頸部が立ち上がり、口縁部は折り曲げ成形により玉縁状を呈する。還元炎焼成されており、色調はにぶい褐色を呈する。上記の諸属性から備前焼と考えられる。

80～83はSC 2 の出土遺物である。80と81は土師器の壺である。80は底部から直線的に胴部が立ち上がり口縁部に至る形態を呈し、底部は糸切りである。81は器壁が薄く、胴部がやや外反しながら直線的に伸び、口縁部に至る形態を呈する。82は土師器の皿である。糸切りの底部胴部がわずかに内湾しながら立ち上がり口縁部に至る形態を呈する。83は陶器の胴部片で、器種は甕か壺と考えられる。外面は自然釉により光沢をもち、色調は褐灰色を呈する。

SC 3 北 2 区中央部でSC 4 と隣接して検出された。最大径1.3mの楕円形プランを呈し、深さは0.27mを測る。断面は逆台形状を呈する。埋土は暗褐色土であり、土坑内から中国産の染付皿が出土している。

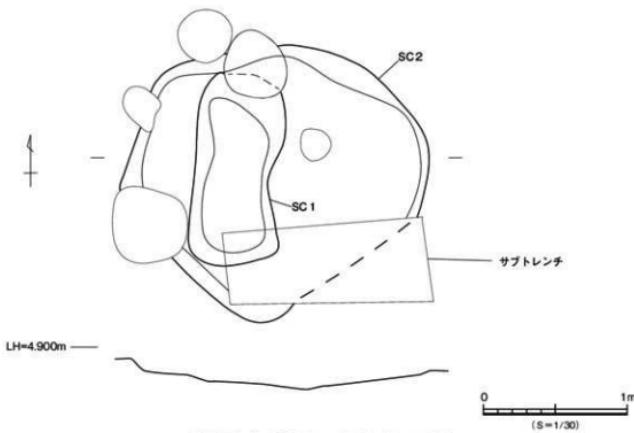
SC 4 SC 3 と隣接して検出された。最大径1.3mの楕円形プランを呈し、深さは0.26mを測る。断面は逆台形状を呈する。埋土は暗褐色土であり、土坑内から白磁皿と瓦質土器の煮沸具が出土している。

SC 5 北 2 区南側で検出された。長軸0.79m、短軸0.47mの台形プランを呈し、深さは0.11mを測る。断面は逆台形状を呈する。埋土は黒褐色土で、埋土中から白磁の碗が出土している。

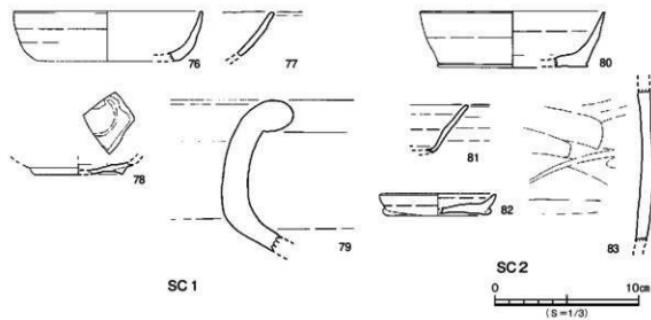
SC 3～SC 5 出土遺物 84はSC 3 出土の染付皿である。底部は格子底を呈し、見込みに文字文がみられる。小野分類の染付皿C群に分類される。

85と86はSC 4 の出土遺物である。85は白磁の皿で、削り出しにより低い高台を作出し、直線的に胴部が立ち上がり口縁部でゆるく外反する形態を呈する。釉薬は口縁部から胴部上半にしか施釉されない。86は瓦質土器の煮沸具と考えられる破片である。鉢部のみが残存しており、調整は丁寧なヨコナデである。

87はSC 5 出土の白磁皿である。断面三角形の高台を持ち、胴部下位が張り、口縁部が外反



第26図 北2区SC1・SC2 (S=1/30)



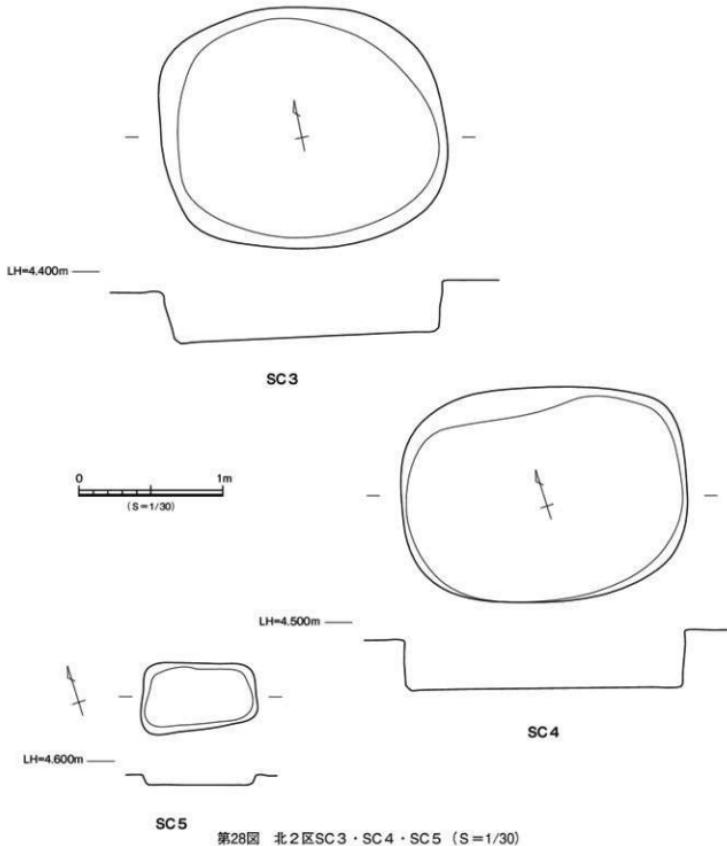
第27図 北2区SC1・SC2出土遺物 (S=1/3)

する形態を呈する。小野分類の白磁皿C群に分類される。

近世

土坑

SC6 北2区南側で検出された。一部を柱穴に切られているが、最大径0.75mの円形プランを呈し、深さは0.29mを測る。断面は逆台形状を呈する。埋土は暗褐色土であり、埋土中から多量の瓦と土瓶が1点出土している。埋土中に浮いた状態で遺物が出土していることから、土坑がある程度埋まつたか、埋めた段階でこれらの遺物が投棄されたものと考えられる。

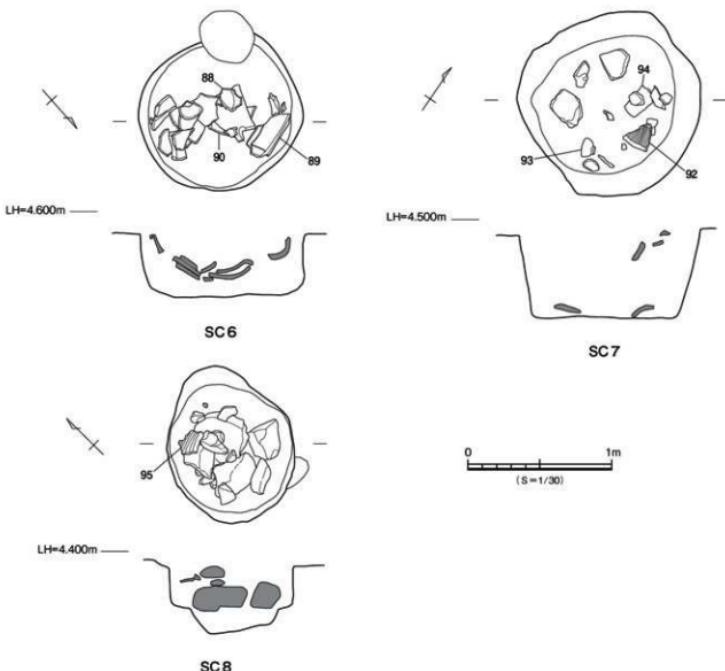


第28図 北2区SC3・SC4・SC5 (S=1/30)

SC7 北2区南側で検出された。一部を柱穴で切られているが、最大径0.85mの不整円形プランを呈し、深さは0.4mを測る。断面は逆台形状を呈する。埋土は暗褐色土であり、埋土内から床面直上にかけて陶器、磁器、瓦、鉄釘、鍬が出土している。

SC8 北2区南側で検出された。最大径0.74mの不整円形プランを呈し、深さは0.36mを測る。断面は二段掘り状を呈する。埋土は暗褐色土であり、二段掘りの上段部と同レベルで鏁が多数出土した他、肥前産陶器壺が1点出土している。

SC6～SC8出土遺物 88～91はSC6の出土遺物である。88は陶器の土瓶で、外面の胴部



第29図 北2区SC 6・SC 7・SC 8 (S = 1/30) *遺物番号は第31～32図と対応

上半部に櫛描状の沈線が施されている。文様は施釉前に施されている。釉調は暗灰色を呈する。89～91は瓦である。89は丸瓦で、凹面に布目痕が認められる。90は平瓦である。凹面に漆喰状の付着物が認められ、凸面には縄目痕が残る。また、部分的にヘラ状工具痕が認められる。91は丸瓦で、凹面に布目痕が認められる。

92～94はSC 7の出土遺物である。92は陶器の擂鉢で、口縁部断面形が三角形を呈する。堺・明石系と考えられる。93は染付の碗である。外面には筆書きにより樓閣山水文が描かれている。94は丸瓦である。凹面に布目痕が認められる。

95はSC 8出土の肥前産陶器壺である。胴部内面に格子目のタタキ當て具痕が認められる。17世紀代に属する。

土坑墓

SD7 北2区北東部で検出された。一部調査区外に広がるが、長軸1.36m以上、短軸0.85m、



深さ0.1mの長方形を呈すると考えられる。埋土は暗オリーブ褐色の砂質土である。埋土中から鉄釘、土師器の小破片、六道銭が出土していることから土坑墓と考えられるが、木棺等の痕跡は認められなかった。

SD7出土遺物 96は六道銭である。麻布と考えられる繊維が広く付着しており（写真図版9）、布で巻かれるか袋状のものに入れられていたと考えられる。銭は計7枚であり、洪武通宝である。96-1、96-4、96-5は裏面に「治」とと思わしき文字が認められることから、治通宝と考えられる。また、その他のものも判読不能であるが同位置に何らかの文字の痕跡が認められる。いずれも鉄分が多く含んでいるのが特徴である。その他、鉄釘や土師器の小破片もわずかに出土したが、図化に耐え得るものはない。

近代以降

溝状遺構

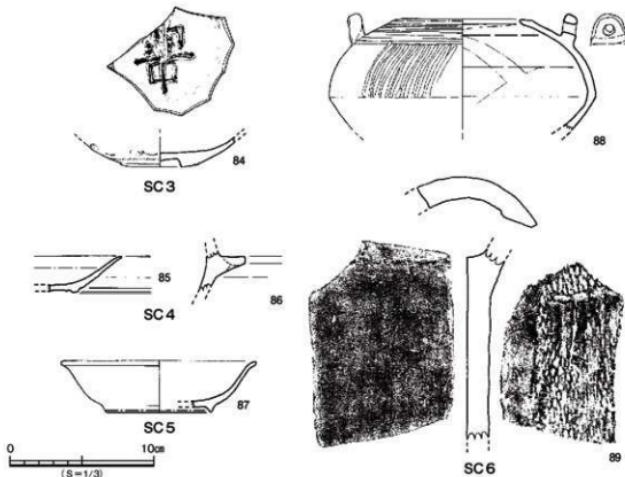
SE8・SE9 SE8は北1区の南側から北側にかけて検出された溝で、北1区の調査区とは並行して伸びている。最大幅1.65m、深さ0.49mで、断面U字状を呈する。埋土は表土と質感が類似する黒褐色土である。SE9は北1区北側でSE8と並走する形で検出され、最大幅1.9m、深さ0.44mで、断面U字状を呈する。埋土はSE8に類似する黒褐色土である。土層からはSE9（古）→SE8（新）という前後関係が確認できる。期間の都合上部分的な調査に留まっているが、両溝内からは中世の土師器と共にプリントの染付磁器が出土していることから、近代以降に埋没したものと考えられる。

SE11・SE12 北2区北端部で検出された。両溝とも切り合いながら並走し、SE11は調査区外の西側と東側に広がる、SE12は東側にのみ広がっている。SE12は最大幅1.1m、深さ0.35mで、断面逆台形状を呈する。埋土は橙色粒子を含む黒褐色土である。SE11は最大幅1.0m、深さ0.59mで、断面U字状を呈する。埋土は橙色粒子を含む黒褐色土である。土層からSE12（古）→SE11（新）という前後関係が確認できる。期間の都合上部分的な調査に留まっているが、両溝内からは弥生中期の大甕片、中世の土師器と共にプリントの染付磁器が出土していることから、近代以降に埋没したものと考えられる。

SE9・SE11出土遺物 97と98はSE9の出土遺物である。97は土師器の皿で、糸切底の底部片である。98は陶器の鉢と考えられる口縁部片である。色調は褐灰色を呈する。

99と100はSE11の出土遺物である。99は弥生土器の大甕片で、中期の山ノ口式である。胎土に金雲母を多く含むことから、大隅半島産と考えられる。100は白磁の碗である。太宰府編年V-4類に分類される。

北1区・北2区その他出土遺物 101は須恵質土器の碗である。器壁は非常に薄手で、胎土はよく精製されている。糸切底の底部から丸みを帯びながら胴部が立ち上がり、わずかに外反する口縁部に至る形態を呈する。文様は、外面の口縁部下位には沈線が1条施されている。色調は灰白色を呈するが、重ね焼によるものか口縁部内外面のみ黒色化している。102は東播系須恵器の鉢である。口縁部上方に拡張されることでく字状を呈するものである。103と104は白磁の碗である。太宰府編年IV類に分類される。105と106は青磁の碗である。いずれも表面に鎧

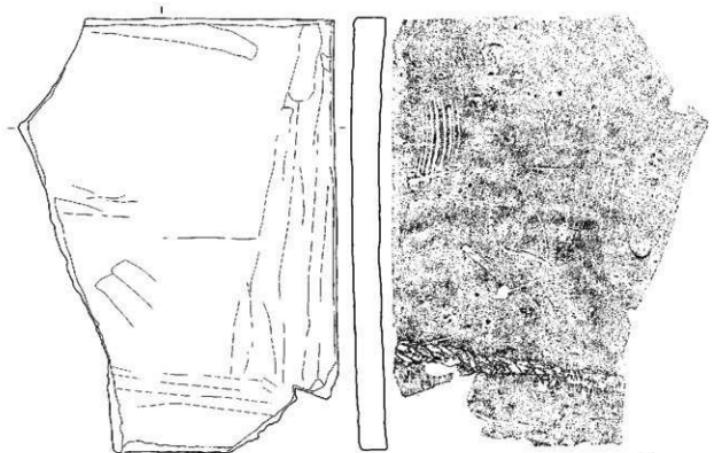


第30図 北2区SC出土遺物① (S=1/3)

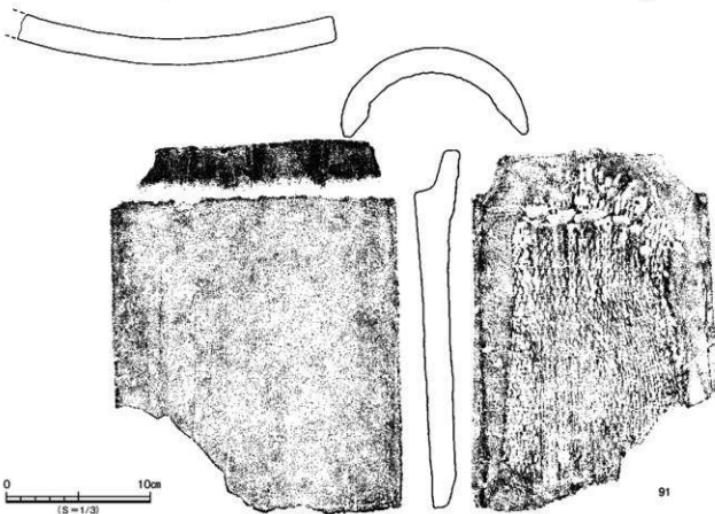
蓮弁文が認められるもので、龍泉窯産である。105は太宰府編年II-a類、106は太宰府編年II-b類に分類される。107は青磁壺の口縁部片である。S字状に屈曲する口縁部を呈し、外面には鍋蓮弁文が認められる。108は陶器の盤と考えられる破片である。軟質で、内外面にオリーブ灰色の釉薬が施釉される。109は備前産陶器の擂鉢である。口縁部は断面三角形を呈し、下端部が拡張される。110は青磁の碗である。底部が厚く、高台疊付と内面に砂目もしくは胎土目の痕跡が認められる。見込みにはロクロ成形に伴う渦巻き状の凹凸が認められる。釉薬は明オリーブ灰色を呈する透明釉で、貫入がみられる。111は染付の皿である。高台疊付に砂目の痕跡が認められる。112は青磁の輪花皿である。柴田分類のB-1類に分類される。

第IV章 総 括

弥生～古墳時代 土坑墓が5基検出された。その内2基からは鉄鎌や刀子が床面で出土しており、副葬品と考えられる。鉄製品以外の遺物が乏しく年代的位置付けが難しいが、SD6から出土している高壺が弥生時代終末～古墳時代初頭に位置付けられることから、土坑墓群の年代は弥生時代終末～古墳時代初頭の年代をとおきたい。土坑墓は二段掘りになるものと、段を有さないもの両方が存在している。また主軸もSD2とSD4は揃っているがその他は統一されていないことから、各墓間には一定の時期幅があることも推測される。これらの土坑墓が



90

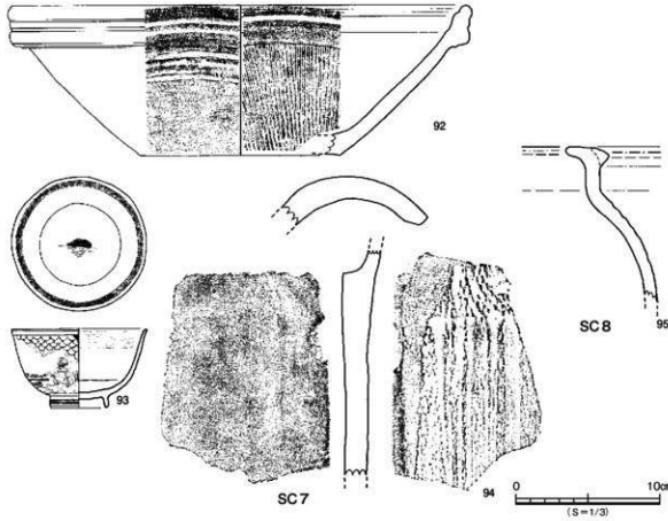


91

SC 6

0
10cm
(S = 1/3)

第31図 北2区SC出土遺物② (S = 1/3)

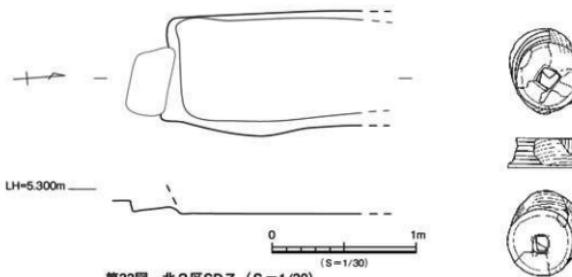


第32図 北2区SC出土遺物③ (S=1/3)

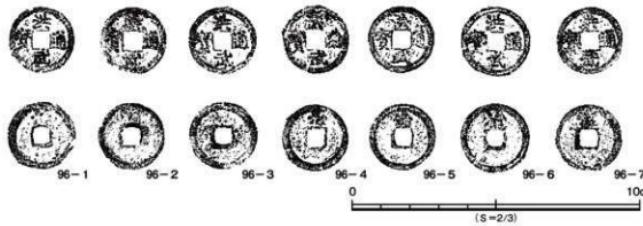
集中する北2区の東北部には同時期の他の遺構が存在しないことから、この一帯に弥生時代終末期～古墳時代初頭の墓域が広がっていたものとみられる。なお、SE9では混入ながらも弥生時代中期の山ノ口式大甕の破片が出土しており、下鶴遺跡周辺に中期の生活域が存在する可能性を示唆している。

中世 下鶴遺跡出土の貿易陶磁器をみると、中世前半期は太宰府編年の中期～下期（10世紀末～14世紀前葉）に属する遺物が調査区のほぼ全域から出土している。中でも特に白磁碗IV類、V～4類、龍泉窯の青磁碗I類、II類の出土量が目立つ。また、東播系須恵器鉢も一定量の出土量があり、その主体は口縁部をあまり肥厚、または拡張させないIIA-1類やIIB-2類である。これらの東播系須恵器鉢の年代は、12世紀中頃～13世紀前半におさまるものである（上床2013）。土師器は小破片が多く良好な資料が少ないが、岡本編年（岡本1995）の12世紀～14世紀、山本・山村編年（山本・山村1997）の中世I期～III期（12世紀前半～14世紀中頃）に比定されるものが出土している。

また、下鶴遺跡で特筆すべきは瓦器の出土である。本書に掲載した以外にも、図化に耐えない小破片が多く出土している。碗は、口唇部断面形が丸みを帯び、口縁部がやや外反するものが圧倒的に多く、わずかに口縁部内面に凹線状の凹みをもつもの（SE5出土の39）がみられる。特にSE5出土の37は和泉型III-1期（13世紀前半）の特徴に類似する。管見の限り和泉型は、県内では宮崎市の中岡遺跡で出土が報告されている他（高橋1994）、未報告資料であるが本市



第33図 北2区SD7 (S=1/30)



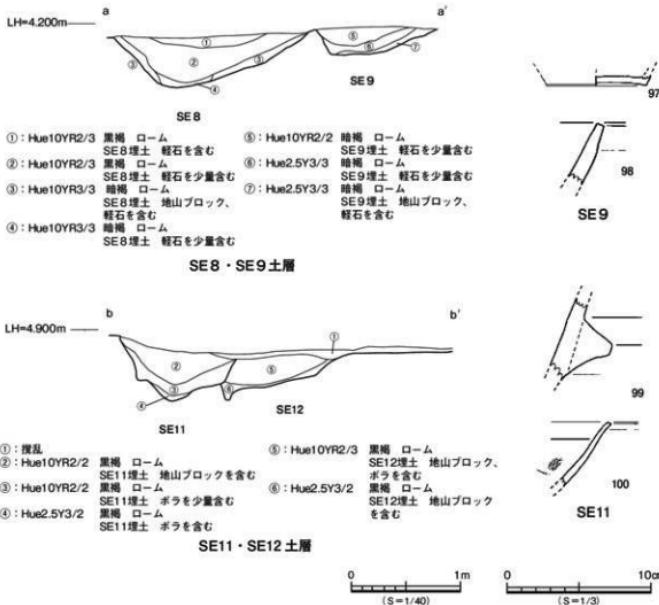
第34図 北2区SD7出土遺物 (S=2/3)

教育委員会が調査した大淀古墳3号墳周辺でも出土している。なお、皿は小破片が多いため組成については不明瞭である。

中世期の遺構として多数の柱穴を検出したものの、掘立柱建物として認定できたものは11軒にとどまった。これには調査面積の問題も少なからず影響していると考えられ、未発掘の周辺部を含めればもっと多くの掘立柱建物が存在すると予想される。

中世前期の遺構としてはSD1・SE4・SE5・SE6・SE7・SE14・SE15・SC1・SC2が挙げられる。南区で検出されたSD1からは、床面直上のほぼ同レベルで完形の土師器環(5)、土師器環の破片(6)、青磁碗の破片(7)が出土している。土師器環5は形態的に13世紀後半～14世紀前半代に位置付けられるが(山本・山村1997)、青磁碗7は13世紀前半代に位置付けられ若干の年代差がある。小破片である6と7に関しては、この土坑墓に直接伴うものか検討の余地を残すといえよう。なお、墓坑床面にピット状の段掘りが検出されたが、どのような機能を持つものかは判然としない。

遺構で目を引くのは大型の溝SE5であり、埋土中からは12世紀中頃～13世紀の貿易陶磁器、瓦器を含む多数の遺物が出土している。また、SE5に並走するSE6でも白磁碗IV類が出土し、それと共に14世紀前半代の白磁皿IX類の出土もみられる。SE5の掘削年代は、床面直上で出土した東捕系須恵器鉢(47)の12世紀中頃という年代が目安になるが、溝上部の破片とも接合しているため確実ではない。また埋没に関しては、北2区西側壁面土層から両者はほぼ同時期



第35図 北1区SE8・SE9・北2区SE11・SE12土層 (S=1/40)

*セクションポイントは第4図と第5図に対応

第36図 北1区SE9・北2区

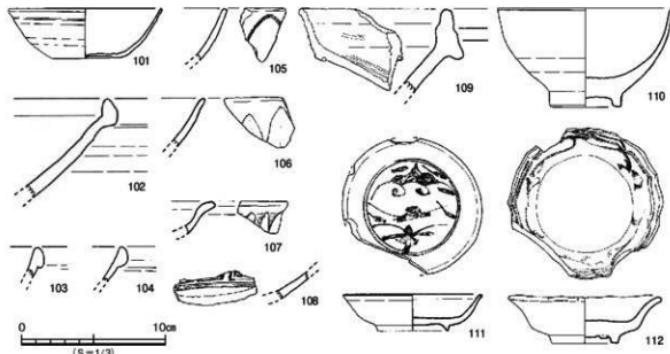
SE11出土遺物 (S=1/3)

に埋没し溝としての機能を失ったとみられ、その年代は出土遺物年代の下限から13世紀中頃～14世紀前半の間と考えられよう。しかしながらこの大溝が居館のような施設に伴うものなのか、または灌溉施設のような役割をもつものかといった、具体的な機能は判然としなかった。なお、北1区でしか検出されていないが、SE4とSE7もSE5・SE6と同方向に走っており、近接した時期に掘削され機能していた可能性がある。

SC1では土器師壺の他に瓦器片と備前产陶器と考えられる壺が出土している。瓦器の口縁部形態はSE5出土のものと類似しており、和泉型の可能性がある。遺構の年代は13世紀後半～14世紀前半（前掲）に位置付けられるだろう。SC2もほぼ同時期の遺構と考えられ、両者は近接した時期の切り合いと見て取れる。

中世後半期は續伸一郎編年（續1995）の第Ⅱ期（15世紀後葉～16世紀前葉）に属する染付皿C群、白磁皿C群、青磁碗、青磁輪花皿といった貿易陶器が出土しているが、中世前半期に比べると圧倒的に出土量が少なくなる。

中世期後半期の遺構としてはSC3・SC4・SC5が挙げられる。いずれも北2区南側に集中



第37図 北1区・北2区その他出土遺物 (S=1/3)

しており、中世後期の遺物の出土もこの周辺にまとまる傾向にある。SC3（15世紀後～16世紀前半）・SC4（16世紀後～17世紀前半）は近接して検出された、規模や形態もほぼ同様の土坑である。出土遺物の年代には若干の開きがあるが、形態的には類似した機能の土坑と推測される。土坑墓の可能性も考えられたが、判然とはしなかった。

以上のように、中世においては12世紀中頃から人間活動の痕跡が現れ、13世紀～14世紀前半に遺物・遺構共にピークを迎える。その後、16世紀前葉まで集落の規模を縮小させながらも存続するという集落の盛衰が認められる。

近世　近世の遺構としては、SE3・SC6・SC7・SC8・SD7が挙げられる。SE3は確認トレチ部分しか調査していないが、本書に掲載した焰硝や堺・明石系播鉢以外にも、コンニャク印判の青磁蓋（18世紀後半）、瓦等が出土している。土坑は北2区南側でまとめて検出されている。SC6からは多量の瓦と土瓶1点が出土しており、出土状況から廃棄土坑と考えられる。同様にSC7も、不要な日常生活品を廃棄した土坑とみていいだろう。SC8は土坑内に礫が詰まって出土しており、その中に混じて17世紀後半に比定される肥前産の甕が出土している。掘立柱建物の基礎としての機能も推測し得るが、この土坑を含む掘立のプランは検出できなかった。

SD7からは麻布に包まれた7枚の洪武通宝が出土している。いずれも鉄分を多く含む銅銭であり、表面に付着する纖維の観察からは麻の布に包まれたか、もしくは袋状のものに入れられた状態で納められたものと考えられる。96-1、96-4、96-5は加治木銭であり、裏面に「治」の文字が認められる。またその他の4枚も鉄分を多く含み、判読はできないが裏面に文字らしきものが確認できることから、すべて加治木銭である可能性が高い。

宮崎県内の六道銭を集成した安藤によれば、洪武通宝6～7枚で構成される六道銭は16世紀後半～近世初頭（1636年の寛永通宝発行以前）に多いとされ、下鶴遺跡のSD7もこの年代に収まるものと考えてよいだろう（安藤2008）。また、7枚という枚数は隣県鹿児島県に多くみ



られる構成であるが、安藤は戦国時代末以後の島津氏の日向国統治との関連から説明できる可能性を示唆している（前掲）。

その他の特徴的な遺物として、南区から四つ目土錐が出土している。平面形態が長方形を呈し、中央に縄目の痕跡が残る形態で、和田編年のⅡ期とⅢ期の特徴を併せ持っている（和田2013）。およそ18世紀代に相当する資料と考えられよう。

また、明確な年代比定はできなかったものの、南区では羽口が出土しており、調査区全域の表土中からも鉄滓が出土していることから、周辺で鉄生産が行われていた可能性が考えられる。

下鶴遺跡は、のちに「赤江湊」と呼ばれる湊に程近い立地であり、中世期における一定量の瓦器の出土もそうした立地に関連する可能性が考えられる。また大型の溝SE5についても、掘削には相当量の労働力を必要とすることから、頭頂のような有力者が掘削に関わった可能性が考えられる。第1章で記したように国富荘成立の時期は明らかではないが、12世紀中頃に始まる下鶴遺跡での人間活動の痕跡が、国富荘開発に関連する可能性も推測されよう。田吉地区周辺における今後の調査の進展に期待したい。

【引用・参考文献】

- 安藤正純 2008 「宮崎県内出土の六道鏡」『宮崎考古』第21号 宮崎考古学会
石川恒太郎 1964 「赤江郷土史」 赤江振興会
上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁統の分類」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
上床 真 2013 「南部九州出土の東播系須恵器について」『東播系須恵器－編年と分布から考える－』 日本中世土器研究会・大手前大学史学研究所
岡本武憲 1995 「13. 九州南部」『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
高橋照彦 1994 「日向出土の畿内瓦器」『中世土器研究』75号 日本中世土器研究会
田中克子 2011 「博多遺跡群出土の中国陶器と対外貿易」『博多研究会誌』20周年記念特別号 博多研究会
續伸一郎 1995 「(3) 中世後期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
橋本和久 2003 「九州出土の畿内産瓦椀ノート」『中世土器の基礎的研究』15 日本中世土器研究会
平部輪南 1976 「日向地誌(復刻版)」 青潮社
堀田孝博 2012 「宮崎平野部における平安時代の土器について－土師器供膳具を中心に－」『宮崎考古』日高正晴先生追悼記念号(上巻) 第23号 宮崎考古学会
山本信夫・山村信榮 1997 「中世食器の地域性10 九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
和田理啓 2013 「第IV章 総括 第7節 いわゆる「四つ目土錐」について」「山崎上ノ原第1遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第224集
九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年」九州近世陶磁学会10周年記念
日本中世土器研究会 2013 「東播系須恵器研究の現状－鉢を中心とした編年研究の現状と分類の提示－」「東播系須恵器－編年と分布から考える－」 日本中世土器研究会・大手前大学史学研究所
太宰府市教育委員会 2000 「大宰府条坊跡XV－陶器分類編－」太宰府市の文化財第49集
宮崎県 1989 「宮崎県史 資料編」考古 I
1998 「宮崎県史 通史編」中世
宮崎県埋蔵文化財センター 2012 「塙見城跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第210集

第1表 遺物観察表①

番号	種別	器種	部位	区	地點	法量 (cm)	調整		色調	年代	備考	
							口径	器高	底径	外面	内面	
1	土 器	瓶	完形	南	SB2	(7.9)	15	(6.3)	回転ナデ	にぶい橙	系切底	
2	土 器	瓶	完形	南	SB2	(7.6)	13	(5.8)	回転ナデ	にぶい橙	系切底	
3	土 器	瓶	完形	南	SB3	(6.8)	12	(5.8)	回転ナデ	橙	系切底	
4	土 器	环	完形	底部	南	SB3	-	09	(6.9)	回転ナデ	にぶい橙	ヘラ切底
5	土 器	环	完形	南	SD1	(11.2)	34	(7.0)	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	
6	土 器	环	口縁部	南	SD1	(12.8)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	
7	青 瓷	碗	胴部	南	SD1	-	39	-	-	-	緑灰	13C ?
8	土 器	塔塔	口縁部	南	SE3	-	38	-	ナデ	にぶい褐	口縁部下位に穿孔	
9	陶 器	搔鉢	口縁部	南	SE3	-	6.7	-	回転ナデ	回転ナデ、カキメ	灰赤	埠・明石系か
10	陶 器	搔鉢	口縁部	南	SE3	-	6.7	-	回転ナデ	回転ナデ、カキメ	にぶい赤褐	埠・明石系か
11	須 患 器	鉢	口縁部	南	F66	-	43	-	回転ナデ	回転ナデ	灰	12c 後～東播系、II A2相
12	土 製 品	羽 真	体部	南	SC12	残存長81	ナデ	ケズリ	-	ケズリ	灰褐	
13	土 製 品	雞	完形	南	一括	縦7.3、横4.4、幅19	ナデ、ユビオサエ、縄目肌	-	-	にぶい橙	18c	和田原町中期～前期
16	土 器	高環	脚部	北2	SD6	4.6	(19.1)	ミガキ	ナデ	にぶい橙		
17	土 器	豆	脚～底部	北2	P290	-	11.8	-	ナデ	にぶい橙		
18	土 器	豆	脚部	北2	P290	-	15.5	-	ミガキ	ユビオサエ、ナデ	にぶい橙	
19	須 患 器	鉢	口縁部	北1	SE4	-	3.0	-	回転ナデ	回転ナデ	灰	12c 中頃 東播系、II A2相
20	陶 器	甕 or 豆	胴部	北1	SE4	-	6.2	-	ナデ	ナデ	暗赤灰	備前焼
21	土 器	瓶	完形	北2	SE5上	(9.0)	13	(5.8)	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	器表面削減
22	土 器	瓶	完形	北1	SE5 F	(9.0)	1.1	(7.0)	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	系切底
23	土 器	瓶	脚～底部	北1	SE5上	-	1.0	(8.0)	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	系切底
24	土 器	瓶	完形	北2	SE5 F	(10.7)	14	(9.0)	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	ヘラ切底
25	土 器	环	完形	北2	SE5上	(13.4)	25	(7.8)	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	系切底
26	土 器	环	脚～底部	北2	SE5 F	-	19	(9.4)	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	ヘラ切底
27	土 器	环	脚～底部	北2	SE5	-	19	(8.2)	回転ナデ	回転ナデ	にぶい褐	ヘラ切底
28	土 器	筍台	脚～脚部	北2	SE5 F	-	44	(8.6)	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	内底面に煤付着
29	土 器	豆	口縁部	北2	SE5 F	-	25	-	ナデ	ナデ	黒褐	外面に煤付着
30	土 器	豆	口縁部	北1	SE5上	-	34	-	ナデ	ナデ	灰赤	歪み大きい
31	土 器	豆	口縁部	北2	SE5上	-	24	-	ナデ	ナデ	ナリーブ黒	
32	土 器	豆	口縁部	北2	SE5	-	33	-	ナデ	ユビオサエ、ナデ	灰赤	口縁部片口状
33	土 器	豆	口縁部	北2	SE5 F	-	55	-	ハケヌメ	ハケヌメ	にぶい赤褐	
34	土 器	豆	胴部	北2	SE5上	-	43	-	ナデ	ユビオサエ、ナデ	にぶい赤褐	外面に煤付着
35	土 器	豆	口縁部	北1	SE5 F	-	55	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	歪み大きい
36	土 製 品	不明	体部	北2	SE5上	-	44	-	ユビオサエ、ハケヌメ	ユビオサエ、ハケヌメ	にぶい赤褐	
37	瓦 器	甕	完形	北1	SE5 F	15.8	49	5.1	ユビオサエ、回転ナデ	ミガキ	灰	13c 前半 見込に平行線状窓文、和泉型Ⅲ期か
38	瓦 器	甕	完形	北1	SE5 F	(14.4)	52	(5.0)	ユビオサエ、回転ナデ	ミガキ	褐灰	13c 前半 見込に平行線状窓文、和泉型Ⅲ期か
39	瓦 器	甕	口縁部	北2	SE5上	-	34	-	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	和泉型Ⅲ期か
40	瓦 器	甕	口縁部	北1	SE5 F	-	14	-	回転ナデ	ナデ	褐灰	
41	瓦 器	甕	口縁部	北1	SE5 F	-	19	-	回転ナデ	回転ナデ	灰	
42	瓦 器	甕	口縁部	北1	SE5 F	-	17	-	回転ナデ	回転ナデ	灰	
43	瓦 器	甕	胴部	北1	SE5 F	-	15	(4.0)	ナデ	ミガキ	褐灰	見込に平行線状窓文
44	須 患 器	鉢	口縁部	北2	SE5	-	48	-	回転ナデ	回転ナデ	褐灰	東播系、II B1相
45	須 患 器	鉢	脚～胴部	北2	SE5 + SE5 F	-	10.8	-	回転ナデ	回転ナデ	黄灰	12c 中頃 東播系、II A2相
46	須 患 器	鉢	口縁部	北2	SE5 + SE5 F	-	7.3	-	回転ナデ	回転ナデ	黄灰	12c 中頃 東播系、II A2相
47	須 患 器	鉢	完形	北2	SE5 + SE5 底	30.5	11.4	103	回転ナデ	回転ナデ	褐灰	東播系、II A2相
48	白 瓷	碗	口縁部	北1	SE5 F	-	2.5	-	回転ナデ	回転ナデ	灰	11c 後～太平府編年Ⅴ期
49	白 瓷	碗	口縁部	北2	SE5 F	-	3.7	-	回転ケズリ	回転ナデ	黄灰	12c 前～太平府編年Ⅴ期

第2表 遺物観察表②

番号	種別	器種	部位	区	地点	法量(cm)			外面	内面	調整	色調	年代	備考	
						口径	器高	底径							
50	白 磁	碗	口縁部	北2	SE5 F	(15.4)	4.3	-	回転ケズリ、回転ナデ	灰白	11c 後~ 12c 前半 V-1類	太宰府編年 V-1類			
51	白 磁	碗	底部	北1	SE5 上	-	2.1	(5.9)	回転ケズリ	回転ナデ	灰白	11c 後~ 12c 前半 V類?	太宰府編年 V類?		
52	白 磁	碗	胴部	北2	SE5 上	-	4.1	-	-	-	灰白	12c 中~ 後半	太宰府編年 V-4類		
53	青 磁	碗	底部	北2	SE5	-	2.2	6.0	回転ケズリ	回転ナデ	灰	12c 中~ 後半	龍泉窯 太宰府編年 I-2類		
54	青 磁	碗	底部	北2	SE5 下	-	2.1	5.5	回転ケズリ	回転ナデ	灰オリーブ	12c 中~ 後半	龍泉窯 太宰府編年 I類		
55	須恵器	甕	胴部	北2	SE5 F	-	7.7	-	ナデ	ナデ	褐灰		外面に付着		
56	陶 器	豆	胴部	北1	SE5 F	-	6.9	(8.8)	回転ナデ、 回転ケズリ	回転ナデ	灰白		輸入陶器か		
57	造石製品	不明	底部	北1	SE5 上	幅6.5、 幅24.6	1.6	ケズリ	-	-			転用品		
58	石 製品	石臼	完形	北1	SE6	幅28.9、 幅23.0、 幅12.3	-	-	-	-			鉛付着		
59	白 磁	碗	口縁部	北2	SE6	(15.6)	4.3	-	回転ケズリ、 回転ナデ	回転ナデ	灰白	11c 後~ 12c 前半 V-1類	太宰府編年 V類		
60	白 磁	皿	底部	北2	SE6	-	3.9	(6.6)	回転ケズリ	回転ナデ	灰白	11c 後~ 12c 前半 V-1類	太宰府編年 V-1類		
61	白 磁	皿	完形	北1	SE6	(9.0)	1.8	(7.0)	回転ナデ	回転ナデ	灰白	13c 後~ 14c 前半	太宰府編年 IX-1類		
62	石 製品	礫石	完形	北2	SE6	幅14.3、 横6.4、 幅27	-	-	-	-					
63	須恵器	鉢	口縁部	北1	SE7	-	2.2	-	回転ナデ	回転ナデ	灰	12c 後半 II A 3類	束縛系		
64	土 製品	鍤	-	北1	SE7	-	6.0	-	ユビオサエ、 ナデ	-	黄灰		欠損		
65	陶 器	鍤?	底部	北2	SE10	-	2.2	-	回転ナデ	回転ナデ	黄灰				
66	土 製品	鍤	-	北2	SE10	-	6.2	-	ユビオサエ、 ナデ	-	黄灰、 にぶい粉		欠損		
67	青 磁	碗	胴部	北2	SE14	-	3.2	-	回転ナデ	回転ナデ	灰	14c 初~ 後半	龍泉窯、 の化粧陶面有り 太宰府編年 IV類?		
68	青 磁	坏	胴部	北2	SE15	-	2.0	-	-	-	灰オリーブ	13c 中~ 14c 初頭	龍泉窯 太宰府編年 III類		
69	青 磁	碗	底部	北2	SE15	-	1.9	5.7	回転ケズリ	回転ナデ	灰	12c 中~ 後半	龍泉窯、 袋付の釉剥が れ有り		
70	土 脇器	皿	完形	北1	SB4	(8.8)	1.3	(7.5)	回転ナデ	回転ナデ	にぶい粉		系底		
71	土 脇器	皿	完形	北1	SB5	(7.7)	1.0	(5.6)	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄粉		系底		
72	土 脇器	皿	完形	北1	SB5	(8.8)	1.5	(7.0)	回転ナデ	回転ナデ	にぶい粉		系底		
73	黒色土器	碗	口縁部	北1	SB5	(12.0)	2.8	-	回転ナデ	回転ナデ	褐灰		器表面摩滅		
74	土 脇器	皿	完形	北1	SB7	(6.5)	1.0	(5.0)	回転ナデ	回転ナデ	にぶい粉		系底		
75	焼生土器	甕?	胴部	北1	SB7	-	4.7	-	ナデ	ナデ	にぶい粉		外前に2条の 化粧		
76	土 脇器	环	口縁部	北2	SC1	(12.9)	3.4	(9.6)	回転ナデ	回転ナデ	にぶい粉				
77	瓦 器	碗	口縁部	北1	SC1	-	3.0	-	ナデ、 ユビオサエ	ミガキ?	灰				
78	瓦 器	碗	底部	北1	SC1	-	0.8	(6.0)	ナデ	ナデ、 ミガキ	灰		内底面に暗文		
79	陶 器	豆	口縁部	北2	SC1	-	10.5	-	回転ナデ	回転ナデ	黄灰		備前焼		
80	土 脇器	环	口縁部	北2	SC2	(12.6)	3.8	(10.2)	回転ナデ	回転ナデ	にぶい粉		系底		
81	土 脇器	环	口縁部	北2	SC2	-	3.2	-	回転ナデ	回転ナデ	橙				
82	土 脇器	皿	完形	北2	SC2	(7.9)	1.5	(7.4)	回転ナデ	回転ナデ	にぶい赤粉		系底		
83	陶 器	甕?	胴部	北2	SC2	-	10.5	-	ナデ	ナデ	褐灰		内面無釉		
84	染付	皿	胴~底部	北2	SC3	-	2.1	4.6	-	-	明緑灰	15c 後~ 16c 前半	小野田C群		
85	白 磁	皿	完形	北2	SC4	-	2.5	-	回転ケズリ	回転ケズリ	灰白	15c 後~ 16c	高台内側に 砂付着 小野田白磁群C群		
86	瓦 器	煮沸具	胴部	北2	SC4	-	2.8	-	回転ナデ	回転ナデ	褐灰				
87	白 磁	皿	完形	北2	SC5	(13.4)	3.5	(7.2)	-	-	灰白				
88	陶 器	土瓶	口縁部	北2	SC6	(7.9)	7.7	-	回転ナデ	回転ナデ	暗灰		側部に輪廻状 模様を分離して 施す		
89	瓦 丸瓦	体部	北2	SC6	幅13.0、 横8.3、 幅3.5	-	ナデ	ケズリ	-	-			四面に塗刷状の 付着物、凸面に 網目状		
90	瓦 平瓦	体部	北2	SC6	幅29.8、 横21.9、 厚2.4	-	ナデ	ハタメ	-	-	灰				



第3表 遺物観察表③

番号	種別	器種	部位	区	地点	法量(cm)			調整	色調	年代	備考		
						口径	器高	底径						
91	瓦	丸瓦	体部	北2	SC6	幅243、横12.9、高3.1	ナゲ	ケズリ	黄灰	四面に布目痕				
92	陶	器	擂鉗	完形	北2	SC7	(31.2)	10.3	13.8	回転ナデ カキメ	にぶい赤褐	堺・明石系か		
93	染	付	碗	完形	北2	SC7	9.4	5.4	4.0	—	墨綠灰			
94	瓦	丸瓦	体部	北2	SC7	幅156、横10.2、高3.3	ナゲ	ケズリ	灰	四面に布目痕				
95	陶	器	甕	口縁部 ～胴部	北2	SC8	—	10.7	—	回転ナデ 胴部ナタキ	灰黄褐	17c	肥前產	
97	土	御	甕	底部	北1	SE9	—	0.7	6.8	回転ナデ 回転ナデ	にぶい橙		赤切底	
98	陶	器	鉢	口縁部	北1	SE9	—	4.3	—	回転ナデ ナタキ	褐灰			
99	出生土器	大甕	突帶	北2	SE11	—	5.6	—	ナタ	ナタ	胎土に金雲母を多く含む。大鍋 島産			
100	白	磁	碗	口縁部 ～胴部	北2	SE11	—	4.5	—	回転ナデ	回転ナデ	灰黄	12c 中～ 後半 太宰府編年 V - 4期	
101	瓦	器	甕	完形	北1	P588	10.4	3.5	4.7	回転ナデ	回転ナデ	灰白	口縁部外側に北緑色、内側に 濃黒色化。赤切底	
102	須	差	鉢	口縁部	北1	P169	—	6.8	—	回転ナデ	回転ナデ	褐灰	13c 前半 東播系、II B3類	
103	白	磁	碗	口縁部	北2	P598	—	2.2	—	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ	11c 後～ 12c 前半 太宰府編年 IV類	
104	白	磁	碗	口縁部	北1	P225	—	2.4	—	回転ナデ	回転ナデ	灰黄	11c 後～ 12c 前半 太宰府編年 IV類	
105	青	磁	碗	口縁部	北2	P325	—	3.6	—	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰	13c 中～ 太宰府編年 II-a 龍泉窯	
106	青	磁	碗	口縁部	北1	一括	—	3.3	—	回転ナデ	回転ナデ	明綠灰	13c 中～ 太宰府編年 II-b類 龍泉窯	
107	青	磁	环	口縁部	北2	一括	—	2.4	—	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰	14c 初頭 外側に錫運弁文	
108	陶	器	盤?	胴部	北2	P299	—	2.3	—	—	—	オリーブ灰		
109	陶	器	擂鉗	口縁部	北1	P396	—	5.8	—	回転ナデ カキメ	回転ナデ カキメ	墨灰	備前焼	
110	青	磁	碗	完形	北2	P296	(12.3)	6.8	4.8	回転ナデ	回転ナデ	明オリーブ灰	上田 E類?	
111	染	付	皿	完形	北2	P325	9.4	2.5	5.0	—	—	墨綠灰	呂付に砂目痕、 中國產か。	
112	青	磁	輪花瓶	完形	北2	P385	10.2	3.3	4.5	—	—	—	15c 中～ 16c	樂田 B-1類

第4表 金属製品観察表

番号	種別	部位	区	地点	法量(cm)			備考		
14	銅鏡	刃部	北2	SD3	現存長80、刃部幅32、厚さ0.35			柳葉鏡、有機質台着、17.3g		
15	刀子	刃部	北2	SD4	現存長63、幅12、厚さ0.3			有機質台着、素刃刀子か、8.3g		
96-1	銅鏡	完形	北2	SD7	外径22、内径0.6、文字部厚0.06、輪部厚0.13			洪武通宝、加治木鏡、2.8g		
96-2	銅鏡	完形	北2	SD7	外径22、内径0.6、文字部厚0.08、輪部厚0.15			洪武通宝、3.1g		
96-3	銅鏡	完形	北2	SD7	外径22、内径0.6、文字部厚0.07、輪部厚0.14			洪武通宝、2.6g		
96-4	銅鏡	完形	北2	SD7	外径22、内径0.6、文字部厚0.08、輪部厚0.14			洪武通宝、加治木鏡、2.2g		
96-5	銅鏡	完形	北2	SD7	外径22、内径0.6、文字部厚0.07、輪部厚0.14			洪武通宝、加治木鏡、2.3g		
96-6	銅鏡	完形	北2	SD7	外径23、内径0.6、文字部厚0.09、輪部厚0.13			洪武通宝、2.5g		
96-7	銅鏡	完形	北2	SD7	外径23、内径0.6、文字部厚0.09、輪部厚0.14			洪武通宝、2.3g		



写真図版 1



南区遺構検出状況
(西より)



南区実掘状況 (西より)



南区SD 1 遺物検出状況
(北東より)



写真図版2



土坑墓群全景（西より）



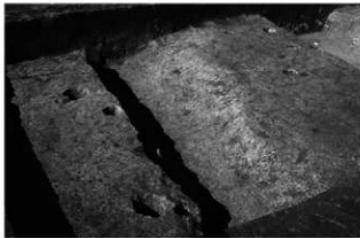
SD3 鉄器出土状況
(西より)



SD4 鉄器出土状況
(西より)



写真図版3



北1区SE4完掘状況（東より）



SE4土層（西より）



北1区SE6土層（東より）



北1区SE6遺物出土状況（西より）



北2区SE5西壁土層（東より）



写真図版4



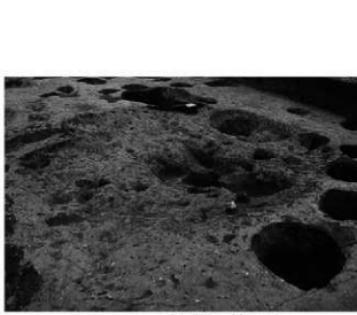
SE7 完掘状況（西より）



北1区ピット群完掘状況（東より）



SE10 完掘状況（西より）



SC1・SC2 完掘状況（東より）



SC6 遺物出土状況（東より）



写真図版 5



SC 7 遺物出土状況
(東より)



SC 8 遺物出土状況
(東より)



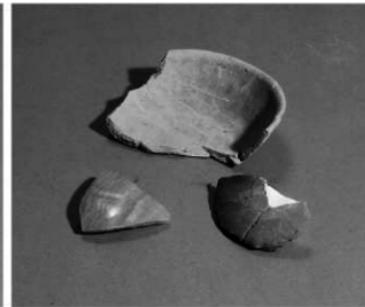
SD 7 完掘状況 (東より)



写真図版 6



南区SB出土遺物



南区SD 1出土遺物



南区SE 3出土遺物



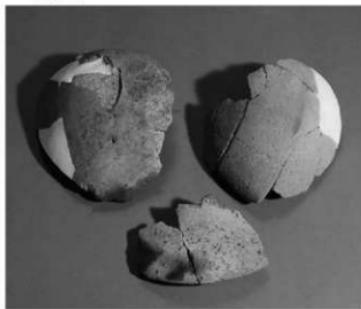
南区その他出土遺物



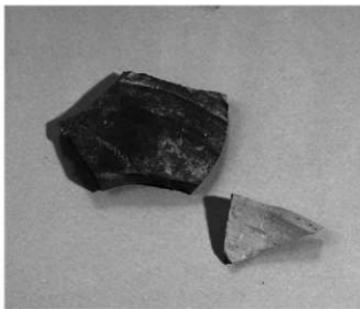
北2区SD出土鉄器



写真図版 7



北2区SD6・Pit290出土遺物



SE4出土遺物①



SE5出土遺物①



SE5出土遺物②



写真図版 8



SE6・SE7 他出土遺物



北1区・2区SB出土遺物



SC1・2 出土遺物



SC6～SC8 出土遺物



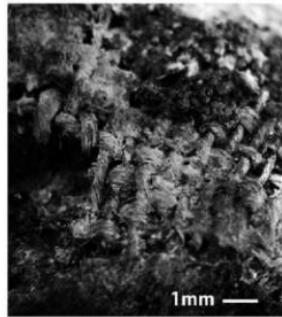
写真図版9



SC 3～SC 5出土遺物



SD 7出土銭



SD 7出土鉄付着の布



SE 9・SE 11出土遺物



北1区・2区その他出土遺物



報告書抄録

ふりがな	しもづるいせき						
書名	下鶴遺跡						
副書名	宅地分譲に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第101集						
編集者名	河野 裕次						
発行機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-0805 宮崎市橋通東1丁目14番20号 TEL (0985) 21-1836						
発行年月日	2013年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因	
しもづるいせき 下鶴遺跡	みやざきし 宮崎市 おわあざだ たじし 大字田吉 あさひ しもづる 字下鶴 はづか 1264番1他	45201	25-027 31°53'19" 付近	131°26'04" 付近 20121001 ~ 20121212	1,736m ²	宅地分譲	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
下鶴遺跡	集落跡	弥生~古墳 中世 近世	柱穴 掘立柱建物 溝状遺構 土坑 土坑墓	弥生土器 土師器 東播系須恵器 瓦器 貿易陶磁器 近世陶磁器 瓦 鉄製品	12世紀後半~13世紀 代に属する大型の溝 状遺構を確認		
要約	弥生時代~古墳時代の土坑墓、中世の溝、掘立柱建物、土坑、近世の土坑、溝等が検出された。遺跡の主な時代は12世紀後半~13世紀代であり、貿易陶磁器や東播系須恵器、瓦器といった豊富な広域流通品が出土した。遺構の中で目を引くのは大型の溝状遺構SE 5であるが、居館のような施設に伴うものなのか、または灌漑施設としての役割をもつものかといった、具体的な性格は判然としなかった。掘立柱建物は11軒を検出したが、周辺にはさらに集落城がひろがるものと推測される。						





宮崎市文化財調査報告書 第101集

下鶴遺跡

宅地分譲に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014年3月
発行 宮崎市教育委員会

